

1 ■ 「ディスペンセーション主義聖書解釈法」問題を考える

ーKBIにおいて「終末論」「ダニエル書」「黙示録」の科目は、いかなるスタンス、つまりディスペンセーション主義の大患難前・千年王国前再臨説(ダービー、シエーファー、ウォルブールド、ライリー等の立場)なのか、歴史的な大患難後・千年王国前再臨説(バス、ラッド、エリクソン、岡山の立場)のどちらで教えるのがベターなのかー

2012.05.08

JEC牧師研修会

JEC一宮チャペル牧師

関西聖書学院組織神学教師

一宮基督教研究所

安黒務

2 ■ 概要

1. わたしの神学的系譜
2. KBIの神学的位置づけ
3. C.R.バスの分析と評価
4. バスの結論への応答:D主義終末論克服の道筋
5. 関連資料リスト
 1. バスの本:序文(スペンサー)と結び(バス)安黒訳
 2. ウェイン・グルーデム著『組織神学』(トリニティ神学校組織神学教授)、「教会とイスラエル」安黒訳
 3. ジョージ・エルドン・ラッド著『最後の事物』(フラー神学校新約神学教授)、「1章:預言的箇所をどのように解釈すべきなのか」「2章:イスラエルについてはどうなのか」「9章:神の国」安黒訳
 4. 安黒務『福音主義神学再考』ー「組織神学」の科目において取り組むべき課題一覧表

3 ■ わたしの神学的系譜A

1. 山崎高校
 1. キデオン聖書、三浦綾子文学
2. 関西学院大学、西宮福音教会、KGK
 1. 聖書研究会ポブラ…伝道的聖研マルコ伝:事実・解釈・適用
 2. 卒論『天職意識の喪失過程ー英国産業革命前後ー』
 1. J.R.W.ストット著『聖書理解のためのガイドブック』:事実・解釈・適用
 3. H.H.ハーレイ著『聖書ハンドブック』:聖書各書の歴史的な文脈を理解した上での聖書通読
3. KBI
 1. H.スウィーガム著『旧新約聖書研究ベテル』:生活の座の視点からのアブラハムの祝福の約束とモーセの律法の理解
 2. E.ザウアー著『世界の救いの黎明』:キリストの完成された贖罪のみわざとそのみわざに根差した聖霊の働きからの視点からのアブラハムの祝福とモーセの律法理解、ドイツのプレザレンの神学者、しかしこの本には直接的なディスペンセーション主義の影響はみられない。
 3. H.シーセン著『組織神学』:神学雑録的、しかし穏健なスタンス、終末論の患難期と教会理解ではディスペンセーション主義の影響がみられる

4 ■ わたしの神学的系譜B

KBI助手時代

1. 卒論:『アブラハムの祝福と律法ー海面下のガラテヤ3・4章』旧約理解の二つの視点の比較研究ーイスラエル民族の生活の座からの理解とパウロ神学の視点からの理解…不思議なことに、ディスペンセーション主義の立場のザウアー著『世界の救いの黎明』から、新約の光(復活信仰と贖罪信仰)から、旧約のアブラハムへの祝福の約束とモーセの十戒とその派生としての諸々の律法の本質を理解するこ

とを学んだ。

2. 担当科目『旧新約聖書研究(ペテル)』:①神の国の前提(創造・墮落・贖罪)、②神の国の準備(五書・申命記的歴史・歴代志的歴史)、③神の国の到来:a. 神の国の定義、b. 神の国現在性、c. 神の国の未来性、④神の国の完成—春名純人著『哲学と神学』、榊原康夫著『聖書の中心的流れ』、浅見定雄著『旧約聖書に強くなる本』、G.Vos "Biblical Theology"、G.E.ラッド著『神の国の福音』…教科書は、スウィーガム著『旧新約聖書研究ペテル』であったが、内容は“神の国”の概念を中心にオリジナルなものにアレンジしていった。その内容は後日、G.ヴォスやG.E.ラッドの理解に近いものであることに気がついた。

5 ■ わたしの神学的系譜C

岬福音教会牧師・KBI講師時代

○『宣教学序説』

1. 宣教の聖書的基盤:①神は宣教の神、②聖書は宣教の書物、③福音は宣教のメッセージ、④教会は証しの共同体、⑤全てのクリスチャンは世界的クリスチャン…この部分は、『旧新約聖書研究ペテル』の名で教えていたオリジナルなものと同重なる。
2. 宣教の歴史的・地理的展開:①地中海のキリスト教の時代、②欧州とアメリカ大陸のキリスト教の時代、③グローバルなキリスト教の時代
3. 宣教と文化の関係:ウィローバンク・レポートより
4. 宣教の戦略的構築:エルマー・タウンズ著作より多様な成長教会の要素の分析・評価

6 ■ わたしの神学的系譜D

共立基督教研究所(東京基督神学校)時代

○共立にて、宣教学の諸科目:聖書的基盤部門、歴史的部門、文化的部門、戦略的部門のより深い学び

○キリ神にて、福音主義神学の諸科目:聖書神学部門、歴史的な神学部門、組織神学部門、実践神学部門

● 今回のテーマとの関連科目

○ 聖書神学部門—宮村武夫師『新約神学』:G.ヴォス "Biblical Theology"、"Pauline Eschatology"、G.E.Ladd "A Theology in the New Testament"、

○ 歴史神学部門—丸山忠孝師『宗教改革史』『キリスト教綱要』『契約神学史』『教会論史』:

○ 組織神学部門—宇田進師『終末論』『現代福音主義神学研究』

○ 共立とキリ神における三年間の学びは、大変有益なものであり、JECまたKBI関連諸教会の信仰と福音理解が、二千年の教会史の流れの中で、どのようなルーツとアイデンティティを継承しているのか、また現在どのような位置にあるのか、その優れた部分は何であり、内包する課題は何であるのか、私たちはどのような方向性をもって進んでいくべきなのか等々について多くのことを教えられた。そのときに教えられたことをJECまたKBIの脈絡の中で、一宮基督教研究所における研究活動とKBI等々における講義・講演において取り組んでいる。その内容の一部は、「福音主義神学:再考」の一覧表に掲載されている。

7 ■ わたしの神学的系譜E

宇田進師「終末論講義ノート」より

○

1. ディスペンセーション主義の内包する問題について、はじめて目が開かれた講義です。それまで、ディスペンセーション主義をあまり深く意識していませんでしたし、問題意識は皆無という状態でした。それまでは、「終末論理解における“健全な”多様性のひとつであり、わたしたちの立場はこのあたりである」とKBIでは教えられていたように思います。
2. しかし、宇田先生の評価は、C.B.パスと同じものであり、「ディスペンセーション主義聖書解釈法は、“不健全で、問題を内包した”聖書解釈法であり、終末論の多様性のひとつであるが、健全な多様性の範囲外に位置づけられるものである」というものでした。わたしにとっては、「寝耳に水、晴天の霹靂」といった感じでした。
3. そのときからずっと、関心をもつ膨大な量のすぐれた関連文献に目を通してきましたが、宇田先生の

指摘の真実性を立証するものばかりでした。それに比して、ディスペンセーション関係の書籍には、そのような議論のあることすら言及がないケースが多いのが現実です。まるで、限られた情報の中で“マイント・コントロール”状態に置かれているかのようです。それは、きちんとした議論の俎上にあげられると、「ディスペンセーション主義聖書解釈法の誤り」が明確になるということからくるのかもしれませんが。以下に、その特徴を列挙します。

1. ディスペンセーション主義とは、ひとつの「聖書解釈法」のことである。
 2. 19世紀、英国の信仰復興運動の「J.N.ダービー牧師による教え」である。
 3. 旧約預言の解釈において、「極端な字義主義」解釈をとる。
 4. 聖書預言の未成就・成就をうさく言い、預言を「予告」と混同し、今日の出来事と聖書預言を「短絡的に同定」します。
 5. イスラエルと教会を明確に区別することを土台として、一体である再臨を、空中携挙(聖徒のための秘密の再臨)と地上再臨(聖徒と共なる公けの再臨)の二重再臨に分けます。
 6. 一体である再臨の前に起こるはずの患難期を、空中携挙と地上再臨の間に置きます。
 7. 患難期に地上にいるはずの神の民クリスチャンを、携挙により天上にあるとし、地上にはイスラエルの民が患難期を通るとします。
 8. 旧新約を通じてひとつであるはずの神の民を、イスラエル民族とキリスト教会の二つの民があるとし、旧約と千年王国の主役はイスラエル民族とし、キリスト教会は“臨時の挿入”とします。
 9. 古典的ディスペンセーション主義では、聖書を七つのディスペンセーションの区別・分割し、それぞれの時代における神の取り扱いの原則が相違すると教えます。
4. 宇田先生の指摘は、上記の「ディスペンセーション主義の背景」を公平・中立のスタンスで、客観的に研究し、書物をしたためたC.B.バスの記述と同様の内容であり、すぐれた神学教師のレベルを明らかにするものである。このような客観的情報を基盤として、日本の福音派神学校の神学教育はなされるべきであると思う。
- 8 ■ **KBIの神学的位置づけの模索Aーディスペンセーション問題に関連して**
KBI信仰告白(25周年記念誌より)
- 9 ■ **KBIの神学的位置づけの模索BーKBI共同経営・神学教育に**
中心的責任を担わせていただいているJEC所属の
「組織神学」担当教師として、KBIにおける神学教育のスタンスの模索
- KBIの信仰告白をみると、
- KBIは、スウェデン・バプテスト系オレプロ・ミッション(現在、三派合同によりインターアクト)の影響もあり、バプテスト的な簡易信条主義タイプの超教派的聖書学校…JECも同じ信仰告白を有している。
- バプテスト教会の信条
1. バプテストとは何か。どこに由来するのか。①バプテスマのヨハネから、②アナ・バプテストから、しかしバプテスト運動とアナバプテストとを歴史的に結び付けることは難しい。③英国の宗教改革の中から出た。国教会(聖公会)内部での改革をあきらめ、そこから分かれた分離主義者(16世紀末～17世紀)である。彼らは、オランダのアムステルダムなどに行き、思想的にアナバプテスト的主張を担う分離派の教会ができる。
 2. その特徴は、
 1. 信条的でない。つまり信条をもとにして教会を形成していく性格のものではない。綿密ではない「教会論」からこのようになった。シュライトハイム信仰告白によれば「ここに集まったすべてのものが信仰告白する。」とする主体的な信条である。つまり、①「集まった信仰者」によって、②「信条および教会」ができる。
 2. バプテストの信仰を組織的に提示してはいない。彼らは信条が聖書にとってかわることを恐れた。彼らの信条は簡易信条主義で、聖書の教えの主要なポイントをあげていく、聖書は聖書のみで十全であるとする考え方であり、群れの一一致のためになめとなる信条のみをとりあげている。(これに対して、ウエストミンスター信仰告白などは「この信条がもっともよく聖書を解説している」とする信条主義である。)…特定の神学的立場に立つのではなく、聖書の教えを素直に信じる、教理は特定の神学を前提とせず、聖書からの帰納的な方法により教理形成していく特徴をもつ。エリクソン著『キリスト教神学』やラッドの著作集はこの特徴を有している。

3. 自己の教理的立場を、他のグループから区別するため弁証的に信条が用いられる。そしてそれは教会員の教育、聖書研究の手引きとして用いられる。
4. 信条は永続的なものではない。教会の主体的な主張により、自由に信条を作ったり、変更したりもできる。彼らはかなり広い立場の枠をつくり、その中での個人の自由をゆるす。(アナバプテストと共通する。)
5. 信仰告白における個人の主体性が強調されている。信仰告白は個人が先にある。(ルター派、改革派は教会の告白が先にある。その教会の告白を受け入れる信仰者を教会に受け入れる。)そして教会の信条にあわなくなったら、自由に教会を変えられる。個々の教会の自主性を認めており、これを拘束する信条を認めない。
6. 宣言的性格をもつ。この世そして他のグループに向かって。
3. 終末論に関しては、第三条「キリスト論」と第五条「人間論・救済論」の告白で言及がある。啓示に基づく神学としての共通理解部分である「個人終末論：個人の時間的死・靈魂の不死・死から復活までの中間状態」と「世界終末論：世の終わりのしるし・キリストの再臨・死者の復活・最後の審判・新天新地」の告白のうちの、キリストの再臨と最後の審判の告白がなされている。啓示の解釈の多様性部分にあたる「千年王国説」と「患難期と再臨の関係」については言及がない。要するに、歴史的教会が保持してきた伝統的終末論を継承することの告白といえる。これらのポイントに関連して、終末論の内容を肉付けしていくことが求められる。その肉付けの方向性を間違いなく選択していくことが求められる。
4. 公平中立な視点からの「古典的ディスペンセーション主義」に関する客観的な学問的研究として定評のあるバスの分析・評価、そしてリベラリズムに対する反動して行き過ぎたファンダメンタリズムの内包する課題に取り組んできたエバンジェリスリズム内における「古典的ディスペンセーション主義」に対する評価、さらにディスペンセーション陣営内での「古典的→改訂→漸進的」への数々の修正・変化等々をみていくときに、「KBI信仰告白」変更とまではいかななくても、①聖書的適格性、②歴史的公同性、③今日的適用性、④自己革新性の原則に照らし、KBIにおける「終末論」「黙示録・ダニエル書」教育における神学的教育におけるスタンスを慎重かつ丁寧に検討すべき時期に来ているのではないかと思われる。
5. KBIの歴史的ルーツとしてのスウェーデン・バプテスト系の流れの中には、米国のバプテスト・ジェネラル・カンファランスにベテル神学校があり、C.B.バスやM.J.エリクソンという中間派の優れた神学者が存在してきた。これらの神学者たちは、G.E.ラッドの著作集等を活用し、「ディスペンセーション主義聖書解釈法・教会論・終末論」が内包する課題の克服に歴史的貢献をしてきた。半世紀以上遅れてであるが、わたしたちKBIの教師陣も同じ課題に取り組むために汗を流すべきではないのだろうか。わたしたちは、関係するペンテコステ・カルスマ派の諸教会に大きな責任を負っているものとして、「ディスペンセーション聖書解釈法→教会論→終末論」問題を、バスのように“徹底して考え抜き、この問題に対してしっかりした評価をくだし、このテーマにおける方向性を定めていくことではないか。そうでなければ、なにも分からない神学生の福音理解は混乱してしまうことになると思う。
6. 中川先生とフルクテンバウム先生の講義・講演・セミナー等に対して、福音主義神学の世界で定着している評価としてのC.B.バス、G.E.ラッド、M.J.エリクソン、御山英雄の分析と評価を紹介したときのあるKBI神学生は、「中川先生は人格的に立派な方であるが、安黒先生はヒステリックである」と評価していると大田先生より聞きました。そのときわたしは「エリクソン神学によりこのテーマに関して、かなり健全な方向に向かってきたKBI神学生の福音理解は相当混乱してきたのだな」と思い、彼らの奉仕の生涯への影響を大変懸念しました。そしてその後それらの悪影響を払しょくするために大変な労力を要しました。結局払しょくできなかった神学生もおられたように思います。

10 ■ KBIの神学的位置づけの模索C-KBI共同経営のペンテコステ諸派への配慮として、ペンテコスタリズムにおける終末論についての一考察

○KBIのシンポジウムでの「レストレーション問題」発表以来、数多くのペンテコスタリズムの歴史と神学についてのすぐれた神学書に取り組んできた。それらの書物の中で、ペンテコステ派において終末論はどのような位置づけにあるのかをみていこう。それは、ディスペンセーション問題が明確にされた場合、“自己革新、可能な部分なのか、あるいは不可能な部分なのか、を検討する必要がある。

- D.W.Faupel "The Everlasting Gospel-The Significance of Eschatology in the Development of Pentecostal Thought-" pp28-29には、義認は改革派の伝統から、聖化はウエスレーの伝統から、

癒しはA.J.ゴードンやA.B.シンプソンから、再臨はJ.N.ダービーからの教えを取り入れてきた、とある。

- A.Anderson "An Introduction to Pentecostalism—Global Charismatic Christianity—" pp.195–196には、今日のペンテコステ派の神学の本質について、それは多様で幅広い神学を包摂しており、特定の神学的立場に重ね合わせてみることは不適切であり、それは神学からみるよりは「ペンテコステの出発点は、『神が私たちとともにおられる』というその特徴的な霊性にあるのである。」
- 終末論との関連でいえば、歴史的な行きがかり上、多くの福音派の中間派諸教派とともに、古典的デスペンセーション主義の影響を陰に陽に受けてきたが、二十世紀中期からの福音主義運動の取り組みの中で、古典的デスペンセーション主義の内包する課題が明らかとなり、多くの福音派諸教派は半世紀前からその克服に取り組んできた。ペンテコステ・カリスマの諸教派においては神学的取り組みがかなり遅れてきたわけであるが、今やペンテコステ・カリスマ派の中にもこれらの課題に取り組む人たちが生まれてきている。(日本でも、万代栄嗣師は、論文でペンテコステ派はデスペンセーション神学を卒業すべきだと書かれている。アッセンブリーでも幾人かの指導的神学教師がそのように考えておられると聞いた。)
- 出版物としても、改革派系の本とデスペンセーション系の本しかないのが日本のキリスト教出版世界であったが、岡山英雄師(聖書神学舎教師)という稀有の「終末論」「黙示録」研究者を得て、聖書からの帰納的方法による健全でバランスのとれた本『小羊の王国—黙示録は終末について何を語っているのか—』(2002)、論文『患難期と教会—黙示録の終末論—』(福音主義神学31号所収、2000)が刊行された。また同じ「大患難後・千年王国前再臨説」に立つエリクソン著『キリスト教神学』(第四巻、2006)も刊行され、両極を避け、穏健中庸な中間派の立場のための基準書となってきている。岡山英雄師によれば今年中に、この立場の『黙示録註解』を刊行するとのことである。わたしも、できるだけ早い時期に、同じ立場のG.E.Ladd "The Last Things" を翻訳出版する予定である。東京の聖契神学校校長の関野祐二校長からは「教科書として使いたいの、できるだけ早く出版してください。」と催促されている本である。これらの本や論文をKBIにおける基準的教科書として用いていただきたいし、そのようなスタンスを確信している教師を「黙示録」担当教師として育てていくべきではないかと思う。その意味で、このテーマで歴史に残る論文を書かれた仲井隆典先生をその候補のひとりとして推薦したい。
- JECでは、多くの先生方にこの方向を理解していただき、その方向に向かって学びつつある段階である。KBIでもエリクソン著『キリスト教神学』を学んだ神学生の多くが、レポート等をもて同様のプロセスの中にあると思われる。ただ、卒業後に現場で板挟みになる例もあるようである。また、KBI内においても、フルクテンバウム師と中川健一師(古典的デスペンセーション主義のDNAを宿す改訂デスペンセーション主義)によるデスペンセーション主義解釈・教会論・終末論の教えにより、神学生の間に「福音理解」に大きな混乱が生じたことがあった。
- 中川師のテレビ伝道による視聴者層を対象に、この「古典的デスペンセーション主義聖書解釈のDNAを宿した改訂デスペンセーション主義の教え」が全国的に提供されている現実がある。わたしは、JEC牧師会や拡大教職者会を通して、何度もこの教えから羊の群れを守るように情報を提供してきた。それは、岡山英雄師の著作やわたしたちのエリクソンやラッド翻訳書等を通して、穏健で中庸で健全な終末論・黙示録理解が学ばれつつあるこの時期に、東日本を襲った地震・津波・放射能汚染のように、誤った教えがわたしたちに委ねられている羊の群れを間違った教えが襲おうとしているからである。
- わたしたちが、KBIにおいて与えられている神学教育における責任とは、このような誤った教えに翻弄されることのない教職者を養成するためである。また、KBIの責任の範囲の外にあたるのであるが、KBIシンポジウム等、さまざまなルート・手段を通してKBI支援諸教会・関連諸教会の教職者・信徒をこのような誤った教えの呪縛から解放していくこともまたKBIの間接的な責任であるのではないかと思う。最低限、間違った教えの「汚染源、となってはならないと思うのである。
- アンダーソンは、前掲書の中の最後の「カリスマ的キリスト教の未来」pp285–286という項目で、世界中のペンテコステ派の諸教会においては、今なお古いフル・ゴスペルのメッセージ「イエスは、救い主、癒し主、聖霊で満たす方、すぐに来られる王」というベルが鳴り響いている、とするとともに、このことはファンダメンタリズムのひとつの様式に帰するものではない、と記している。というのは、ペンテコステ派は奴隷のようなわたしたちの聖書の字義主義に従っているというよりも、もっと御霊の啓示と自由を通しての直観や滋養著的なものに強調点があるからである、とまとめている。これは、ペンテコステ・カリスマ派が、「古典的デスペンセーション主義」を盲目的に墨守しているグループとは異なり、ペンテコステ・カリスマ的経験を重視しつつ、「古典的デスペンセーションの衣」を脱ぎ捨て、健全でバランスのとれた帰納的聖書解釈である「大患難後・千年王国前再臨説」に衣を変えることができる柔軟性を宿していることを示している。

○JECにおいては、元々「ディスペンセーション主義神学」とは一体化されたアイデンティティではなく、終末論において影響されてきた程度であったので、神学的精査の後に「自己革新、することは可能な柔軟性を有している。ただ、ペンテコステ諸派にとって、「ディスペンセーション神学」がどの程度のものであったのか、そしてそれは「自己革新、可能なものなのかどうか、ペンテコステ運動全体とその教えの変遷等に関するの慎重な研究が必要とされていると思う。そしてこのことは、KBIの神学教育が、①聖書的適格性、②歴史的公同性、③今日的適用性、④自己革新性を証していく上で大変重要な要素であると思うのである。

- 11 **KBIの神学的位置づけの模索D: 安黒『組織神学』講義における「福音主義神学:再考」一覧表: KBIの神学教育は、今何処にあるのか、そして何処に向かって進むべきなのか?**
1. KBIの神学教育は、今何処に位置づけられるのだろうか?
 1. KBI神学教育の歴史的・神学的位置づけの模索
 2. リバラル神学に対する反動としてのファンダメンタルな神学・ディスペンセーション主義の聖書解釈法の功罪
 2. KBIの神学教育は、何処に向かって進むことが主の御心なのだろうか?
 1. ファンダメンタルな神学・ディスペンセーション主義の聖書解釈法が内包する課題の克服の青写真・ロードマップとしてのエリクソン著『キリスト教神学』
 2. エリクソン著『キリスト教神学』の「大患難後・歴史的千年王国前再臨説」
 3. KBIのダニエル書・黙示録の科目は、どのようなスタンスの教師が教えることが主の御心なのだろうか?
- 12 **KBIの神学的位置づけの模索E: 安黒『福音主義神学』講義より歴史神学軸におけるKBIの位置づけの模索**
- A. 使徒時代から十七世紀まで
- 13 **KBIの神学的位置づけの模索F: 安黒『福音主義神学』講義より歴史神学軸におけるKBIの位置づけの模索**
- B. リバラルに対する行き過ぎた反動部分の克服
- 14 **KBIの神学的位置づけの模索G: 安黒『組織神学』講義より組織神学軸におけるKBIの位置づけの模索**
- 15 **KBIの神学的位置づけの模索H: 安黒『組織神学』講義より組織神学軸におけるKBIの位置づけの模索**
- 16 **KBIの神学的位置づけの模索I: 安黒『組織神学』講義より組織神学軸におけるKBIの位置づけの模索**
- 17 **KBIの神学的位置づけの模索J: W.グルーテム『組織神学』安黒翻訳より: ディスペンセーション神学の変遷とその特徴**
- 18 **KBIの神学的位置づけの模索K: G.E.ラッド『最後の事物』安黒翻訳より: 旧約の預言的箇所解釈方法**
- 19 **概略**
1. 状況分析と評価
 1. 序: S.R.スペンサーより
 2. 前提主義的分析と評価: 卵とひよこと鶏の類比
 1. C.B.バス著『ディスペンセーション主義の背景』より
 1. ディスペンセーション主義「聖書解釈」の誤りとは
 2. ディスペンセーション主義の「教会論」への悪影響
 3. ディスペンセーション主義の「終末論」への悪影響
 3. 前提の誤りがもたらす誤った聖書解釈の分析と評価
 1. 仲井隆典著『ディスペンセーション主義終末論の克服』

1. 終末論の争点
2. 終末論の捉え方
4. KBI教師会の取り組むべき課題
 1. 結び: C.B.バスより

20  **C.R.バスの分析と評価A**

状況の分析と評価

序: S. R. スペンサー、W. グルーデムより

1. D主義に関する学識の新時代の到来(1960年)
2. 最も重要な案内書
3. D主義の種々の発展におけるダービーの位置づけ
4. バスの公平かつ客観的で、論争的でない手法
5. 古典的D主義(シェイファー、ウォルブード)
 1. 二つの異なった神の民、二つの別個の計画
 1. イスラエル: 地上的祝福、千年王国における地上的支配で成就
 2. 教会: 天的祝福、教会は携挙され天において成就
6. 改訂D主義(ライリー)…中川師、フルクテンバウム師の位置
7. 漸進的D主義(サウシー、プレイジング、ポック)…福音聖書神学校の真鍋師の位置

21  **C.R.バスの分析と評価B**

歴史的教会の信仰からの逸脱としての

デイスペンセーション主義「聖書解釈」の誤り: 比較対照表

- 1 デイスペンセーション主義
- 2
 1. デイスペンセーションの本質と目的
 2. 聖書の(極端な)字義的解釈
 3. イスラエルと教会の二分法
 4. 教会についての制限された見方
 5. 王国のユダヤ的概念
 6. 延期された王国
 7. 人間に対する神の取り扱いを生み出す律法と恵みの区別
 8. 聖書を区分すること
 9. 患難前携挙説
 10. 大患難の目的
 11. キリストの千年王国支配の性質
 12. 字義的な「永遠の状態」理解
 13. キリスト教界の背教的性質—地上の見える教会と見えない天的教会
- 3 福音主義
- 4
 1. 使徒は旧約と新約は有機的一体理解
 2. 使徒の聖書解釈の原則のバランス
 3. 使徒は霊的・有機的に一体と理解
 4. 使徒は旧約と新約の霊的連続性理解
 5. 使徒は神の国を普遍的に理解
 6. 使徒には延期という考え方はない
 7. 使徒には、人間に対する神の取り扱いに差別はない
 8. 使徒は聖書を有機的一体的に理解
 9. 使徒は患難後携挙説理解
 10. 使徒は教会が患難期を通ると理解
 11. ユダヤ的ではなく、普遍的

- 12.象徴的描写と理解
- 13.見える教会と見えない教会の理解

22 ■ C.R.バスの分析と評価C: 比較対照表
 デイスペンセーション主義の「教会論」への悪影響

- 1 デイスペンセーション主義
- 2 1. イスラエルと教会の関係
 - 2. イスラエルがイエスの提示された神の国を拒否したため、臨時に、一時的に異邦人に提供
 - 3. 見える地上の教会の腐敗、分離の傾向
 - 4. 教会は天的、患難前に携挙
 - 5. 大患難の預言は、イスラエルに
 - 6. イスラエルに対する旧約の預言は、千年王国時代にすべて成就する
 - 7. 神の国(普遍的)と天の御国(ユダヤ的)の相違
- 3 福音主義
 - 4 1. 旧新約の神の民の一体性
 - 2. 旧約と新約の霊の神の民は有機的に一体である
 - 3. 見える教会と見えない教会のバランスのとれた考え方、秩序とカリスマの両面
 - 4. 教会は、地上で患難・保護・証し・殉教
 - 5. 大患難の只中で教会は守られる
 - 6. 神の民は有機的に一体、旧約預言は千年王国・新天新地に重ねて言及
 - 7. 神の国は、「神の支配」であり、教会はその表れ

23 ■ C.R.バスの分析と評価D: 比較対照表
 デイスペンセーション主義の「終末論」への悪影響

- 1 デイスペンセーション主義
- 2 1. 教会は秘密の空中再臨のときに、携挙される
 - 2. 地上に残された神の民はイスラエル民族であり、大患難を通る
 - 3. イスラエルと教会は別個のものである
 - 4. イスラエルが国家として特別な身分に再び置かれる
 - 5. 旧約の預言はどれも教会に関係せず、教会において成就していない
 - 6. 千年王国は、ユダヤ的な王国である。
 - 7. 実際のダビデ王国が再建され、旧約の犠牲までも復活する。
- 3 福音主義
 - 4 1. 教会は大患難の只中で保護され、証しし、殉教をも恐れない
 - 2. 民族としてのイスラエルの中にも、大患難の中でリバイバル
 - 3. 救われたユダヤ人は教会に統合
 - 4. 民族としてのイスラエルへの特別な言及は新約にはあまりない
 - 5. 使徒たちは、旧約用語を使用して「新約の教会」を説明
 - 6. 千年王国は、ユダヤ的な王国ではなく、救われたユダヤ人と異邦人による普遍的な王国
 - 7. 再臨はひとつであり、空中再臨・携挙・地上再臨は一体の流れの中にある
 - 8. 新約で、千年王国に対する言及はきわめて少ないので、空想してはいけない

24 ■ C.R.バスの分析と評価Eー結び: C.R.バスより: 私たちはバスの考え抜いた結論に対しどのようなレスポンスをするのか

- 1. バスの命題
 - 1. デイスペンセーション主義は教会の歴史的信仰の一部分ではない。
 - 2. デイスペンセーション主義が定式化される以前に18世紀間に渡って歴史的千年王国前再臨説の聖書解釈が存在してきたのだから、デイスペンセーション主義は唯一の千年王国前再臨説の見解ではない。

3. そして、ディスペンセーション主義は聖書解釈において誤った解釈学の原理を基盤としている
2. 三つの諸説の共有するもの—ディスペンセーション主義の健全な教えの部分
 1. イエスが再臨の日には人格的に、文字通り、目に見えるかたちで地上に戻って来られる
 2. それらの諸説は教会の祝福された望みを取り巻いている出来事の時間的な順序で意見を異にしている
 3. これら三つの諸説はみな、新約聖書著者たちもまた共有している「キリストが再臨される」という最も重要な強調点を共有している。
3. 交わりと議論
 1. この真理の中樞を共有しつつ、これら三つの諸説の信奉者のすべては、愛と忍耐の交わりを保つことができる。
 2. 終末論の解釈に関して意見を異にするかもしれない、そして真の聖書解釈の原理を見出すために賢明に議論すべきである。しかし交わりの試金石としてはならない。
4. 意見の相違、権利の擁護、忍耐
 1. わたしは、それらの解釈においてわたしのディスペンセーション主義の兄弟たちとかなり意見を異にしている。
 2. しかし彼らがディスペンセーション主義の捉え方を信奉する権利を擁護したい。
 3. わたしはディスペンセーション主義が誤った聖書解釈であると受けとめている。しかしわたしと意見が一致しないからといってだれとも関係を断つつもりはない。わたしは同じ忍耐をこれらの問題に関して意見が一致しない人々にも与えられることを願っている。
5. 徹底して考え抜き、「ディスペンセーション主義」に新しい評価を！
 1. 愛において交わりを保ちつつ、わたしはディスペンセーション主義が歴史的信仰からの逸脱であり、聖書解釈における誤った方法に基づいていると強く確信している。
 2. それゆえ、わたしはきわめて大胆にも、もしわたしがわたしの命題を立証しえたなら、
 3. わたしもまたそうしなければならなかったのと同様、多くのディスペンセーション主義者が徹底して考え抜き彼らの終末論の思想体系に対して新しい評価を下すに至るであろうことを期待しているのである。

25 ■ バスの結論への応答として—D主義終末論の克服の道筋A: 1. 携挙について

- 1 ディスペンセーション主義
- 2 ○教会は、キリストの秘密の空中再臨のときに携挙される。
 - 支持聖句とその解釈
 - I テサ5:9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。
 - I テサ 4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。
 - 患難に会うことなく携挙される
- 3 福音主義
- 4 ○教会は、空中・地上一体の再臨のときにキリストに会うために引き上げられる。
 - D主義解釈の分析・評価
 - 患難の只中で守られる
 - 会う “アパンテス、” は、出迎えて一緒に戻る。空中で会い、ただちに地上に戻る

26 ■ バスの結論への応答として—D主義終末論の克服の道筋B: 2. 再臨のあり方

- 1 ディスペンセーション主義
- 2 ○キリストは秘密裏に空中に再臨され、教会を引き上げられる。その後、大患難が終わった時に地上に再臨される。キリストの再臨は、「空中再臨」と「地上再臨」の二回である。
 - 支持聖句とその解釈
 - Mat24:27 人の子の来るのは、いなく東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来る(パルレーシア)のです。

○Mat24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。

○パルーシアは携挙、アポカリュプシス、エピファネイアは地上再臨

3 福音主義

4 ○キリストの再臨は、空中・地上一体の再臨一回のみである。

○D主義解釈の分析・評価

○2Th2:8 その時になると、不法の人が現れますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨(パルーシア)の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。

○不法の人が滅ぼされるのは地上再臨のときである。

○1Pe1:7 あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れ(アポカリュプシス)のときに称賛と栄光と栄誉になることがわかります。

○アポカリュプシスのときに栄光と栄誉を受ける。

○Tit2:13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れ(エピファネイア)を待ち望むようにと教えたとしたからです。

○教会が待ち望む祝福された望みは、エピファネイアである。

○以上の結果として、三つの用語は交換可能な用語であり、空中・地上一体の単一の再臨

27 ■ バスの結論への応答として—D主義終末論の克服の道筋C: 3. イスラエルと教会

1 ディスペンセーション主義

2 1. イスラエルと教会は、別個の実体である(神様はイスラエルを選ばれ、神の民として無条件契約を結ばれ、特別に祝福を注がれた。この約束は、イスラエル民族固有のものであり、教会(クリスチャン)において成就するものではない。神はイスラエルに対する特別な扱いを中断しておられるが、未来のある時点で必ずイスラエルは回復する。イスラエルに関してまだ成就していない預言は、イスラエル民族に成就されるのであって、教会において成就するのではない)

2. 教会は、イスラエルの取り扱いについての神の全般的なご計画の中の挿入である。

○旧約聖書の光の下に、新約聖書を再解釈している。新約聖書本来の意味を、旧約的視点で歪めている。

3 福音主義

4 1. 旧約のイスラエルの民と新約の教会(クリスチャン)は同質である。(民族としてのイスラエルではなく、真のイスラエルと、クリスチャンは神様に対する信仰において同質であり、この流れは旧約・新約を通して一貫している。)

2. 旧約のイスラエルと新約の教会に対する神様の取り扱いに違いはなく、神の民という点において同一である。

○旧約聖書をイエス・キリストのみわざを中心に再解釈した結果が新約聖書である。旧約聖書の中に、“重ね絵”のようにして啓示されている意味を抽出している新約の聖書解釈の原則に忠実である。

28 ■ バスの結論への応答として—D主義終末論の克服の道筋D: 福音主義における聖書解釈の原理

1. G.E.ラッド(フラー神学校新約聖書神学教授): 旧約預言は、新約をもとに解釈されるべきである。

1. メシア預言(イザヤ11、ダニエル7、イザヤ53)

2. イスラエルに関する預言(ホセア1:10,2:23、ローマ4:11-12, 9:6-8,24-26)

3. イスラエル回復の預言(ヘブル8:13、ローマ11:23,25-26)

2. W.グルーデム(トリニティ神学校組織神学教授): イスラエルと教会は同質である。

1. 信仰における同質性(ローマ2:28-29, 4:11-12)

2. 目的における同質性(エペソ2:14-15, 3:6)

3. 契約における同質性(エレミヤ31:31-34, ヘブル8:8-10)

4. 祝福における同質性(I ペテロ2:4-9)

3. J.マーレー(ウエストミンスター神学校組織神学教授): 民族的イスラエルは、真のイスラエルではない。

1. 民族的イスラエルは、真のイスラエルではない(ローマ4:20-21, 9:6-8)

2. イスラエルの回復は、異邦人と同様に信仰による(ローマ11:16-26)

29 ■ バスの結論への応答として—D主義終末論の克服の道筋E: 4. 患難について

- 1 デispensーション主義
- 2 ○教会は、大患難の前に引き上げられ、地上を襲う患難に会わない。
 - 支持聖句とその解釈
 - マタ 24:24 にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。
 - 「選民」を救われたイスラエル等と
 - Rev3:10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう(テレオー)。
 - Rev4:1 その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラツパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」
 - 教会は携挙され、黙示録の患難はイスラエルの民が対象
- 3 福音主義
- 4 ○教会は大患難の中でも守られ、保護される。
 - Mat24:22 もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。
 - ペンテコステ以降、「選民」とは教会
 - Joh17:15 彼らをこの世から取り去ってください(アイロー)ようにというのではなく、悪い者から守ってください(テレオー)ようにお願いします。
 - 患難前に取り去られるのではなく、患難の只中で守られる
 - 神の民の苦難—旧新約の神の民の苦難、過去(一世紀)・現在・未来(終末)の苦難
 - エジプト、カナン、バビロンで、イエス、使徒、初代教会も、歴史上の教会、そして終末の教会も、患難は避けるべきものではなく、本質的なあり方、多くの苦しみを経て、苦難によって寝られ、清められ純化されて、神の国に入り、再臨の主に会う

30 ■ バスの結論への応答として—D主義終末論の克服の道筋F: 5. 千年期について

- 1 デispensーション主義
- 2 ○千年期前再臨説をとるが、千年期はイスラエルにとっては特別な祝福の時である。
 - エレ30:3 見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、わたしの民イスラエルとユダの繁栄を元どおりにすると、【主】は言う。わたしは彼らをその先祖たちに与えた地に帰らせる。彼らはそれを所有する。」
 - 新改訳改訂第3版 サブ聖書ウインドウ No.2
 - エゼ
 - 39:25 それゆえ、神である主はこう仰せられる。今わたしはヤコブの繁栄を元どおりにし、イスラエルの全家をあわれむ。これは、わたしの聖なる名のための熱心による。
 - 千年王国はイスラエル民族中心である。
- 3 福音主義
- 4 ○千年王国は、キリストの支配が地上に及ぶ歴史的千年王国である。
 - ヘブル 8:5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」
 - ヘブル8:13 神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いとされたのです。年を経て古びたものは、すぐに消えて行きます。
 - ロマ11:22 見てごらんください。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。
 - 11:23 彼らであっても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わせる事ができるのです。

- ロマ11:25 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、
- 11:26 こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。
- 民族的イスラエルも救われる、しかしそれは教会と同じ信仰によるのであり、教会に接木される
- 千年王国時代とイスラエルとの関係についての新約の言及はない、民族主義的視点は消え失せ、普遍主義的視点が明確である。

31 ■ **D主義終末論の克服の道筋G**
6. 終末論の捉え方

- 1 デイスペンセーション主義
- 2 ○「二つの神の民、二つの神のプログラム」
 - 旧約の光をもって、新約を再解釈すると「新約」の意味の変質をもたらす
 - 新約聖書には、ユダヤ民族色の強い王国到来の記述は存在しない
 - 「曲がった包丁はどんなに鋭くても、かまぼこのどこを切っても曲がってきってしまう。」
- 3 福音主義
- 4 ○「一つの神の民、一つの神のプログラム」
 - イエス・キリストの人格と使命の光をもって旧約を再解釈するとき、新約を結実する
 - 新約聖書は、救われたユダヤ人と異邦人が一体となったキリスト教会による祝福された神の国の到来が待望されている

32 ■ **バスの結論への応答として—終末の出来事**

1. 患難時代⇒初代教会の時代から現代を通して、将来のキリストの再臨の時まで。この時代に、黙示録6章以下の預言が成就する。
2. キリストの再臨⇒信者はキリストのもとに引き上げられ、キリストに会う。その後、キリストとともに地上に戻る(再臨は一回)。この時までには、キリストを信じて死んだ死者がよみがえり、再臨の時に地上に生きていた信者に優先して、キリストに出会う(第一の復活)。
3. 千年王国⇒信者がキリストとともに、地上を治める。サタンは縛られて、人々を惑わすことはない(黙示録20:2~6)。
4. 白い御座のさばき⇒サタンは解き放たれ、最後のさばきを受けて、地獄に落とされる。未信者もさばかれ、地獄に落とされ、永遠の苦しみを味わう。(第二の復活)(黙示録20:7~15)
5. 新天新地⇒神がともにおられる世界の実現。永遠の世界(黙示録21章、22章)

「2005年版への序」 by S. R. Spencer

幾つかの他の今日の諸研究とともに、『ディスペンセーション主義の背景』(1960)の最初の出版は、ディスペンセーション主義に関する学識の新しい時代の到来をしるしづけた。ディスペンセーション主義ははじめて第一義的に論争的でない批評的な分析を受け取った。気が遠くなるほど膨大な第一義的資料に対するバスの広範な研究と神学的諸発展についての注意深い分析は、この目立った神学的伝統への歓迎すべき洞察を提供している。

『ディスペンセーション主義の背景』は、この伝統について研究する者にとって最も重要な案内書であり続けている。バスは、助けになるようにと「牧師レベルのディスペンセーション主義者」とより精巧かつ緻密で微細な差異を区別する「学究的レベルのディスペンセーション主義者」を区別している。そのような区別はほとんどの神学的諸伝統にもあてはまるかもしれないけれど、ディスペンセーション主義の扱い方としてきわめて適切なことといえる。「牧師レベルのディスペンセーション主義者」は、おおむね福音主義とアメリカ文化双方の内部において「学究的レベルのディスペンセーション主義者」に数においてはるかにまさっており、ディスペンセーション主義の知れ渡っている外観を特色づけている。C. I. スコフィールドやアルノ・ギャブレインから、ハル・リンゼイやティム・ラヘイまで、そして大勢の聖書教師や牧師たちの「牧師レベルのディスペンセーション主義者」は外部の人と内部の人双方に一樣に彼らの最も強力な概念を供給している。

『ディスペンセーション主義の背景』は、1800年代初期から中期の英国におけるジョン・ネルソン・ダービーとプリマス・ブレザレン運動の下にあったディスペンセーション主義の出現を洞察に満ちたことばで説明している。その脈絡はこの伝統を解明するとともに、ディスペンセーション主義のうちに存在したブレザレン運動とブレザレン運動に属さなかった多様なグループとの間の幾つかの重要な相違点をも明らかにしている。19世紀と20世紀前半にわたっての米国におけるディスペンセーション主義の多様性と種々の発展は、ディスペンセーション主義が長く引きずっているジョン・ネルソン・ダービーの神学の影を過小評価することのできないことをわたしたちに思い起こさせる。けれども、多くのディスペンセーション主義者は急激にダービーの系統から距離を置くようになっている。後代のディスペンセーション主義者はダービーにとって最も特徴的であった捉え方の幾つかを改変したけれども、ダービーの貢献は初期のディスペンセーション主義にとって決定的なものであったことを正確に立証している。わたしたちは、ダービー基本的な役割を過度に強調することをも避けつつ、それを過小評価することもしてはならない。バスの著作は、ダービーの神学に関する重要な資料源と後代のディスペンセーション主義において持続力となったものを明らかにしている。

バスは、その主題に関して「公平かつ客観的に扱う」ことを試み、「論争的でない手法」において書かれた著作と評されている、論争的でない研究を提供することを探求した。「その目的はディスペンセーション主義に反対する論拠を構築することではなく、公平無私かつ客観的にこの思想体系の歴史的な誕生がどのようなものであったのかを確定しようとすることである。それゆ

え、その本は学究的レベルのディスペンセーション主義者を論駁することを目的としているものではなく、それは牧師レベルのディスペンセーション主義者がその体系を理解できるように助けることのみを意図したものである。」公平無私な客観性という主張は、特にディスペンセーション主義に対するバスの以前の傾倒からして、1960年代に彼らが取り組んだとき以上に、まことしやかに思われたいかもしれない。しかし、バスの批評はディスペンセーション主義を最良のかたちで取り扱っている。

バスの著作が最初に出現し、さらに1977年に再販されて以来ディスペンセーション主義神学に多くのことが起こってきた。チャールズ・C・ライリー著『今日のディスペンセーション主義』（ムーディ出版、1965）、と『新スコフィールド・リファレンス・バイブル』（オックスフォード大学出版、1967）は、ディスペンセーション主義における重大な展開をしるしづけた。もろもろの批評には責任をもって応答をなし、数多くの誤りは正しつつ、ライリーはディスペンセーション主義の多様性と古典的ディスペンセーション主義と改訂ディスペンセーション主義とを区別した。著名なディスペンセーション主義の教師たちからなる高名な編集委員会により改訂されたスコフィールド聖書は、スコフィールド聖書の最も問題のある注釈箇所を取り除き、他の注釈もまた修正した。

展開の第二段階は、「漸進的ディスペンセーション主義」として知られるものとして結実することとなった1980年代と1990年代に出現した。（神学者たちではなく、その神学に名づけられた）この名称は、贖罪史における種々の管理責任の間にある統一性と連続性に大きな強調の光が当てて際ただせられている。それはまたディスペンセーション主義との、他の福音主義の諸伝統、プロテスタント、そして普遍的で伝統的なキリスト教会の伝統との関係を強調するものである。ほとんどの漸進的ディスペンセーション主義者は、キリストの未来における千年王国支配を主張しつつ、開始されたメシヤ的王国という見方、そして社会的・文化的脈絡の中における、そしてその中への教会のミニストリーにとっての神の国の意義を教える。

漸進的ディスペンセーション主義は、幾らかのディスペンセーション主義の教授陣や神学生の間に関心を集めた支持者を得てきたけれども、それはディスペンセーション主義のより巨大な集まりのうちの単なる小規模の少数者派を代弁しているにすぎない。ディスペンセーション主義者たちの大多数はより初期の諸展開の幾つかの形態に傾倒し続けている。ライリー・スタディ・バイブルに則したライリーの本（1995年に改訂された）と、改訂されたスコフィールド・バイブルは、レフト・ビハインド・シリーズのように、そのニュアンスはしばしば大衆文学からかけ離れたものではあるのだが、相変わらず最も基本的な神学的言明を保持し続けている。ほとんどの今日の唱道者はその歴史的諸展開や彼らの神学における多様性について無知であるが、それらの改訂版の多くは、バスが強い光を当てている諸特徴を語りかけている。『ディスペンセーション主義の背景』は、それらの諸展開の非常に重要な初期の諸段階をよりよく理解するために貢献している。わたしはこの再販を喜び歓迎している。

「結びの言葉」 by G. B. Bass

この本の命題は「ディスペンセーション主義は教会の歴史的信仰の一部ではない。ディスペンセーション主義が定式化される以前に 18 世紀間に渡って歴史的千年王国前再臨説の聖書解釈が存在してきたのだから、ディスペンセーション主義は唯一の千年王国前再臨説の見解ではない。そして、ディスペンセーション主義は聖書解釈において誤った解釈学の原理を基盤としている」というものである。わたしはこれらの命題を立証しえたかどうか、読者の判断に委ねたい。

しかしながら、整理が必要とされるもう別の局面が存在する。ディスペンセーション主義聖書解釈法に内在する幾つもの極端な要素にもかかわらず、ディスペンセーション主義の聖書解釈は、「イエスが再臨の日には人格的に、文字通り、目に見えるかたちで地上に戻って来られる」という真理をきわめて明確に系統立てて説いている。歴史的千年王国前再臨説も同じく、無千年王国説もまた同様である。それらの諸説は教会の祝福された望みを取り巻いている出来事の時間的な順序で意見を異にしている。しかし、これら三つの諸説はみな、新約聖書著者たちもまた共有している「キリストが再臨される」という最も重要な強調点を共有している。

この真理の中枢を共有しつつ、これら三つの諸説の信奉者のすべては、愛と忍耐の交わりを保つことができる。終末論の解釈に関して意見を異にするかもしれない、そして真の聖書解釈の原理を見出すために賢明に議論すべきである。しかし交わりの試金石としてはならない。

わたしは、それらの解釈においてわたしのディスペンセーション主義の兄弟たちとかなり意見を異にしている。しかし彼らがディスペンセーション主義の捉え方を信奉する権利を擁護したい。わたしはディスペンセーション主義が誤った聖書解釈であると受けとめている。しかしわたしと意見が一致しないからといってだれとも関係を断つつもりはない。わたしは同じ忍耐をこれらの問題に関して意見が一致しない人々にも与えられることを願っている。

愛において交わりを保ちつつ、わたしはディスペンセーション主義が歴史的信仰からの逸脱であり、聖書解釈における誤った方法に基づいていると強く確信している。それゆえ、わたしはきわめて大胆にも、もしわたしがわたしの命題を立証しえたなら、わたしもまたそうしなければならなかったのと同様、多くのディスペンセーション主義者が徹底して考え抜き彼らの終末論の思想体系に対して新しい評価を下すに至るであろうことを期待しているのである。

教会とイスラエル

—Wayne Grudem “Systematic Theology” pp.859-863—

090720

安黒務翻訳

福音主義プロテスタントの間に、イスラエルと教会の関係の問題の見方において相違が存在する。この問題は、“ディスペンセーション”の神学体系を保持する人々において顕著である。ディスペンセーション主義者によって書かれた最も広範な組織神学書であるルイス・スペーリー・シェイファーの組織神学書は、イスラエルと教会、そしてさらに旧約聖書にあるイスラエルを信じることと新約聖書にある教会を信じることの間にある多くの相違点を指摘している。シェイファーは、彼が贖われた二つの異なった人々の民に対する二つの別個の計画をもっていると主張している。イスラエルに対する神の目的と約束は地上的な祝福である。そしてそれらは未来のある時にこの地上においていつの日か成就されるであろう。他方、教会に対する神の目的と約束は天的な祝福である。それらの約束は、天において成就されるであろう。神が救われる二つの群れの間この相違は、特に千年王国において見られる。シェイファーによれば、その時にイスラエルは神の民として地上において支配し、旧約聖書の約束の成就を喜ぶ。しかし、教会は聖徒たちのためのキリストの秘密の来臨(“携挙”)のときにすでに天に挙げられている。この見方に関して、教会はペンテコステ(使徒2章)まで始まっていなかった。そして、旧約聖書時代の信仰者と新約聖書時代の信仰者をひとつの教会を構成するものとして考えることは正しくない。

シェイファーの立場は幾つかのディスペンセーションの範囲内で、より大衆的な説教においては間違いなく影響を持ち続けている。しかしより最近のディスペンセーション主義者の中の数多くの指導者たちは、それらの多くのポイントにおいてシェイファーに習っていない。ロバート・サウシー、クレイグ・プレジング、ダレル・ボックのような、最近の幾人かのディスペンセーション主義の神学者たちは、彼ら自身を“プログレッシブ・ディスペンセーション主義者ⁱⁱ”と紹介している。そして彼らは幅のある以下の事柄を手にした。彼らは、教会を神の計画の中の挿入としてはみない。彼らは教会を神の国を樹立する第一歩としてみる。プログレッシブ・ディスペンセーション主義の観点において、神はイスラエルと教会に対して二つの別個の目的をもたない。神は、イスラエルと教会と一緒に分かち合う—神の国の樹立—という単一の目的のみをもたれる。プログレッシブ・ディスペンセーション主義は、すべては神の一つの民の一部分であるのだから、未来の永遠の状態においてはイスラエルと教会の間に相違を見出さない。さらに、彼らは教会は千年王国の間地上で栄光のからだにおいてキリストとともに支配すると主張する。

しかしながら、プログレッシブ・ディスペンセーション主義者と他の福音主義との間にはひとつのポイントにおいてまだ相違が残されている。彼らは、イスラエルに関する旧約聖書の預言は、なおキリストを信じる民族としてのユダヤ人によって千年王国期に成就さ

れ、あらゆる民族が見て学ぶように“模範的民族”としてイスラエルの土地に住むと言う。それゆえ、彼らは、それらの預言がなお民族としてのイスラエルに成就するゆえに、教会が“新しいイスラエル”であるとか、イスラエルについての旧約聖書の預言のすべては教会において成就するとは言わない。

この書で取り上げている立場は、この問題に関するシェイファーの観点からは少し相違する。また、プログレッシブ・ディスペンセーション主義者とも幾分かは相違する。しかしながら、未来についての聖書の預言が成就する正確な道筋への問いは、問題の性質上、確実性をもって決定することは困難であるといここで言わなければならない。そしてそれらの事柄に関し幾分試験的な結論を手にするには賢明なことである。このことを留意しつつ、以下のことが言える。

ディスペンセーションの立場以外のプロテスタントとカトリックの双方の神学者は、教会は旧約聖書時代の信仰者と新約聖書時代の信仰者の両者をひとつの教会、またひとつのキリストのからだに包摂していると語ってきた。非ディスペンセーション主義的見方においてさえ、未来においてユダヤ人の大規模の回心が起こる（ローマ 11:12,15,23-24,25-26,28-31)ⁱⁱⁱ、しかしこの回心はユダヤ人信仰者が神のひとつの教会の一部分と結実する一彼らは“彼ら自身のオリーブの木に再び接ぎ木”される一のみであると主張する。

この問題に関して、私たちは、教会を“新しいイスラエル”また新しい“神の民”と理解している多くの新約聖書箇所注目すべきである。「キリストは教会を愛し、御自身を彼女に与えられた」(エペソ 5:25)という事実は、このことを示唆している。さらに、教会に非常に多くのクリスチャンの救いをもたらしている現在のこの教会時代は、神の計画の中での中断とか挿入ではない。ご自身の民へと呼びだす旧約聖書を通じて明らかにされている神の計画の継続である。パウロは「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって**人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人**であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです」(ローマ 2:28-29)と語っている。パウロは、肉的にアブラハムの子孫である人々がユダヤ人と呼ばれる文字的また生来的な意味があるけれども、“真のユダヤ人”とは人目に隠れた信仰者である人、そして心が神によってきよめられた人であるとより深く、また霊的な意味があるとはっきり認めている。

パウロは、アブラハムは肉的な意味でユダヤ人の父と考えられるだけではない、と語っている。彼はまたより深いまたより真実な意味において「彼が、**割礼を受けないまま**で信じて**義と認められるすべての人の父となり**、…また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです」(ローマ 4:11-12; cf. vv.16, 18)。それゆえ、パウロは「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、アブラハムから出た

からといって、すべてが子どもなのではなく、『イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる』のだからです。すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです」(ローマ 9:6-8)とすることができる。パウロはここで、最も真実な意味で“イスラエル”である人々、アブラハムの真の子供は、アブラハムの肉적인血統によるイスラエル民族ではなく、キリストを信じる人々であることを意味している。真にキリストを信じる人々は今、主によって“わが民”(ローマ 9:25、ホセア 2:23 からの引用)と呼ばれる特権にあずかっている人々である。それゆえ、教会は今神の選ばれた民である。このことは、肉によるユダヤ人は未来のある時に大規模に回心するとき、彼らは神の分離された民であり続けることはなく、彼らは「彼ら自身のものであったオリーブの木に接ぎ木」される(ローマ 11:24)。このことを示唆しているもうひとつの箇所は、ガラテヤ 3:29 の「もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです」である。同様に、パウロは、クリスチャンは「真の割礼の者」(ピリピ 3:3)であると語っている。

イスラエルの民から分かれた群れとしての教会について考えることから離れて、パウロは、彼らが以前は「イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人」(エペソ 2:12)であった。しかし、今や彼らは「キリストの血によって近い者とされた」(エペソ 2:12)と彼らに語りかけるようにエペソにいる異邦人信仰者たちに書いている。そして異邦人が教会に加えられたとき、ユダヤ人と異邦人はひとつの新しいからだに統合された。パウロは、神は「二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、敵意を廃棄され…二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです」と語っている。それゆえ。パウロは、異邦人は「聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です」と言うことができた。新約聖書の教会に対する旧約聖書の背景の広範な自覚に関して、パウロはなお「異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり」(エペソ 3:6)ということができた。その箇所全体は、ユダヤ人信仰者と異邦人信仰者がキリストあってひとつのからだに統一されることについて力強く語っている。そしてキリストのひとつのからだである教会の包摂されずに救われ、ユダヤ民族に対する別個の計画があるとのいかなる示唆も決して与えられていない。教会は、それ自身の中にすべての真の神の民を合体させる。そして、旧約聖書の神の民に使用されてきた称号のほぼすべてがいろんな箇所で新約聖書の教会に適用されている。

ヘブル 8 章は、教会をイスラエルに関する旧約聖書の約束の受領者、そしてその成就としてみることに関するもうひとつの論拠を提供している。クリスチャンが属する新しい契約について言及する脈絡において、ヘブル書の著者は、「主が、言われる。見よ。日が来る。わたしが、**イスラエルの家やユダの家と新しい契約を結ぶ**日が。…それらの

日の後、わたしが、イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、主が言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」(ヘブル 8:8-10)と言われるエレミヤ 31:31-34 からの広範な引用を与えている。ここで著者は、イスラエルの家とユダの家と新しい契約を結ぶという主の約束を引用する。そしてそれは今教会と結ばれた新しい契約であると語っている。その新しい契約は教会にいる信仰者が今一員である契約である。著者が、旧約聖書のイスラエルへの約束の成就を見出しているのは、真の神のイスラエルとしての教会であると見ているという結論を避けることは困難であると思われる。

同様に、ヤコブは多くの初期のキリスト教会への一般書簡を書いた。そして彼は「国外に散っている十二の部族へ」(ヤコブ 1:1)書き送ったと語っている。これは明らかに、彼が新約聖書のクリスチャンをイスラエルの十二部族の継承者であり、成就であると見ていることを示唆している。

ペテロもまた、同じふうに語っている。彼は「散って寄留している」読者に呼びかけている最初の節から、彼が「バビロン」(I ペテロ 5:13)と都市ローマに呼びかけているほとんど最後の節まで、ペテロはしばしば、イスラエルに与えられた旧約聖書のイメージと約束の観点で新約聖書のクリスチャンについて語っている。この主題は、神が旧約聖書におけるイスラエルへ約束された祝福のほとんどすべてを授けられたとペテロが語っている、I ペテロ 2:4-10 において顕著である。クリスチャンが神の新しい“神殿”(5 節)であるゆえに、神の御住まいはもはやエルサレムの神殿ではない。クリスチャンは今、神の御座(4-5, 9 節)に近づくことのできる真の“王である祭司”であるゆえに、神に受け入れられる犠牲をささげる祭司はもはやアロンの家系を必要としない。クリスチャンは今真の“選民”(9 節)であるから、神の選民はアブラハムから血縁的な子孫の人々であるとはもはや言われぬ。クリスチャンは今神の真の“聖なる国民”(9 節)であるから、神によって祝福された国民はイスラエルの国民であるとはもはや言われぬ。クリスチャン—ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャン—がいま“神の民”であり、“あわれみを受けた”者であるから、イスラエルの民はもはや神の民であるとはいわれぬ。さらに、ペテロは旧約聖書の脈絡から、神が彼に対して執拗に反逆し、彼が据えられた尊い“礎石”(6 節)を拒絶する彼の民を退けられることを繰り返し警告している。それらの引用を取り上げている。教会は今神の真のイスラエルであり、旧約聖書においてイスラエルに約束されたすべての祝福を受け取る^{iv}ことを確信をもって私たちに話すために、これ以上どんな言及が必要とされるのか。

ⁱ ルイス・スペーリー・シェイファー、『組織神学』。通常ディスペンセーション主義者に特徴的な幾つもの特有の教理があるけれども、おそらく神の全包括的な計画における二つの民としてのイスラエルと教会の相違が最も重要である。ディスペンセーション主義者によって保持されている他の教理には通常、大患難期前の天への教会携挙、イスラエルに関する旧約聖書預言の未来における文字通りの成就、神の民に関する神の取り扱い方の七つの時期あるいは“ディスペンセーション”に聖書の歴史を分けること、教会時代を時代の間

の神の計画における挿入として理解すること、主としてユダヤ人がイエスを彼らのメシヤとして拒否したときに制定された挿入。しかしながら、今日の多くのディスペンセーション主義者はそれらの特徴の幾つかを修正したりあるいは拒否したりしている。体系としてのディスペンセーション主義は、英国の J.N.ダービー(1800-1882)の著作をもって始められた。そしてスコフィールド・リファレンス・バイブルを通して米国で広まった。

ii 参照 : Robert L. Saucy, *The Case for Progressive Dispensationalism*(Grand Rapids: Zondervan, 1993), and Darrell L. Bock and Craig A. Blaising, eds., *Progressive Dispensationalism*(Wheaton: Victor, 1993). John S. Feinberg, ed., *Continuity and Discontinuity: Perspectives on the Relationship Between the Old and New Testaments*(Wheaton: Crossway, 1988)

iii 私はディスペンセーション主義者ではないけれども、その用語を通常理解されている意味において、ローマ 9-11 章は未来におけるユダヤ人の大規模な回心を教えていると確信している。

iv ディスペンセーション主義者は、教会がイスラエルに関する旧約聖書預言の多くの**適用**の受領者であるとする。しかしそれらの約束の真の**成就**は今なお民族としてのイスラエルの未来においてもたらされるという点を許容する。しかし、教会へのそれらの約束についての、それらすべての明確な適用の新約聖書の実例に関して、このことが本当に、神がそれらの約束を与えようとしておられる唯一無二の成就であることを否定するいかなる強固な理由も存在しているようには思われない。

[ICI](geI_t_01)★ Biblical_Theology_ by Aguro ★

One More Paragraph!

—聖書神学的瞑想のひとつ—

PW:0747

こんにちは、関西聖書学院神学教師、一宮基督教研究所の安黒務です。今日は、ジョージ・エルドン・ラッドの「最後の事物」の第一章「預言的聖書箇所をどのように解釈すべきなのか」を学んでまいりましょう。

【 テキスト 】

わたしたちが、聖書は最後の事物について何を教えているのかの研究に入っていく前に、わたしたちは**方法論の問題**に直面する。わたしたち終末論をどのように構成しうるのであろうか。福音主義者は、**聖書が聖霊によって靈感され、信仰と実践における唯一の誤りのない規範**を構成していると理解している。

多くの福音主義者たちは、聖書全巻の靈感は**同じ神学的な価値からなる結論**に導くと思っている。聖書のうちにある多くの預言は、現在と未来の両方に対する**神の贖罪的目的の巨大なモザイク画**をわたしたちに与えており、それらはぴったり調和させあてはめていくことのみが必要な**ジグソーパズルの断片の集まり**のように思える。

しかしながら、少し顧みてみると、このような事の運ばれ方は実際には存在しないことが明らかとなる。**旧新の二つの聖書は、主題に関してきわめて異なったテーマ**を所有している。旧約聖書は第一義的には**イスラエル民族**、神が特別な民であるように召された**アブラハムの子孫である選民**—に関心をもっている。イスラエルは、**君主制、神殿、祭司制**をもつ他の諸国民の中のひとつの民族を構成していた。旧約聖書は第一義的には**この民族の物語**、他の民族との**戦争、宗教的復興と背教**、アッシリヤやバビロンの手による**最終的な政治的敗北と捕囚**、そしてエズラ・ネヘミヤの時代にパレスチナの**彼らの土地への残り民の帰還**である。

君主制と捕囚の時代を通して、預言者は**イスラエルの背教**のゆえにその民族の上に**神の裁きを宣告**するためにイスラエルの人々の間に現れた。しかしまた、イスラエルの背教は**最終的なものでも、治療不可能なものでない**ことをも知らせるためにも現れた。いまだ明らかでない未来において、神はイスラエルの民の間に**リバイバル**起こされ、その結果イスラエルの民は**神への悔い改めと従順**に立ち返らされる。これは、同様にイスラエル民族への**神の愛顧の結果**である。イスラエルはその**土地を相続し平和と繁栄を回復**されるだろう。旧約聖書において、終末的救いはいつも、イスラエル民族の**民族的、神政政治の運命の視点**において描

かれています。旧約聖書の中には**キリスト教会についての明確な預言は存在しない**。異邦人は、実際にイスラエルの未来において**ひとつの場所**をもっている。しかし**異邦人の位置づけ**について、旧約聖書には**統一的な概念は存在しない**。ときどき、異邦人はイスラエルに仕えるように力をもって**無理やり強制され服従**させられる。(アモス 9:12、ミカ 5:9-13; 7:16-17、イザヤ 45:14-16,49:23,60:12,14)。他の事例においては、異邦人は**イスラエルの信仰に回心**し、イスラエルの神に仕えるものとしてみられている。(ゼパニヤ 3:9,20、イザヤ 2:2-4, 42:6-7, 60:1-14、ゼカリヤ 8:2-23, 14:16-19)。イスラエルは神の民のままである。そして未来の救いは**まず第一にイスラエルの救いがある**。

私たちが新約聖書に向かうとき、私たちは**大変異なった状況**にまみえる。イエスは、イスラエルの救い主としてご自身を提供されたが、**拒否**され最後には**十字架につけられた**だけであった。結果として「神の国はあなたがたから**取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられ**」た(マタイ 21:43)。しかしながら、イスラエルの民の**残りの者**はイエスのメッセージに 응답し、イエスの**弟子**となった。使徒行伝は、ペンテコステにおける**教会の誕生の物語**を告げている。ただ、教会はイスラエルとは**根本的に異なったもの**であった。**民族**である代わりに、教会はイエスが救い主であると信じた人々の**開かれた交わり**であった。最初、教会は**大部分がユダヤ人**で構成されていた。しかし、使徒行伝は、教会がどのようにして**異邦人世界**に出て行き、教会の交わりに**多くの異邦人を受け入れていったか**を告げている。そしてローマにおける**大部分が異邦人である教会**にパウロが御言葉を語っている物語で終わっている。**新約聖書における終末論**は、その大部分が**教会の運命**を扱っている。

さて、私たちは**二つの物語**を手に入れている。**イスラエル民族**の物語と**教会**の物語である。私たちは**この明らかなディレンマをどう扱うべきなのか**。

二つの**根本的に異なった解答**が提示されてきた。そしてすべての預言研究者は二者択一を迫られている。第一のものは、神は**二つの異なったプログラム**—すなわち**イスラエルのために一つ**、そして**教会のために一つ**—を持っておられると結論を出している。イスラエルは、パレスチナの**約束された土地を相続**するよう運命づけられた**神政政治の民族**であったし、今もそうであるし、これからもそうであるべきである。イエスは、**旧約聖書の諸々の預言が文字通り成就**するとき、**文字通りのダビデ的な王**となられる。この体系は**ディスペンセーション主義**と呼ばれている。それは、通常、ディスペンセーション主義の主要な教義は、神がご自身の民を異なった方法で扱われる**一連のディスペンセーション**あるいは**時代区分**である。しかしながら、これは不正確である。この規範で判断するとき、すべての聖書研究者はディスペンセーション主義者であるにちがいないということになる。アブラハムの後の約束の時代、モーセの下での律法の時代、キリストの下での恵みの時代、

そして未来における神の国の時代があるといわれる。しかし、**ディスペンセーション主義の二つの主要な教義**とは、むしろ、神が**二つの異なったプログラム**と運命—つまりイスラエルのために**神政政治的・地上的プログラム**と運命を、また教会のために**霊的・天上的プログラム**と運命—をもっておられる、**神の二つの民が存在する**ということである。(参照：C.C.Ryrie, Dispensationalism Today, Moody, 1965, p.97)

預言を解釈する第二の方法は、**漸進的啓示**を認め、旧約聖書を**新約聖書によって解釈**することである。ディスペンセーション主義者は、それは旧約の契約と新約の契約の統一的な要素を強調しているゆえに、通常これを**契約神学**として言及する。しかしながら、この方法を支持している現在の著者(ラッド自身)は、契約神学の中で育てられたゆえに、そのようにするのではない。事実、最も初期において、彼はディスペンセーション主義者であった。彼が、旧約聖書は**イエス・キリストによって与えられた人格と使命における新しい啓示によって解釈**(あるいは、しばしば再解釈)されなければならないと確信するようになった理由は、彼自身の**聖書における帰納的な研究を通して**である。

私たちがこの**原則**を**終末論**に適用する前に、私たちは聖書的な**キリスト論—メシヤ**についての聖書の教え—の概観において**その有効性**を確立することに努めるとしよう。

旧約聖書には、お互いにどのように関係しているのかについて示唆されずに並列して立っている**三つの救い主の人物像**がある。最初のものは、**ダビデ的な王としての救い主**—新約時代においては、「救い主」「キリスト」「油注がれた者」と呼ばれている—である。この**ダビデの王座につらなる王室の子孫**は、生き生きと**イザヤ 11 章**に描かれている。イザヤは、ダビデの父、エッサイの王室の血統の家系が倒された日を見ている。あたかも、ダビデの子孫の救済史的希望は挫折させられたかのように見えた。しかし、その**倒された木の切り株から、新しい芽、新しい枝、新しい王室の子孫**が生まれ出る。「その上に、主の霊がとどまる。」それは、彼に知恵と悟り、そして知識を授ける。これは、同様に彼が真の正義、義、公正をもって彼の民を統治することを可能にする。彼の第一義的な使命は、**公正な王としての統治**である。彼は彼の民を**正しく統治**されるだけでなく、彼は**神に敵対する者や神の民すら打つ**ためにもそれを授けられている。「口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。」その結果は、**平和と幸福の支配する世界**となる。呪いは自然界から取り除かれる。獐猛な獣は残忍さを消される。「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。」しかしながら、これは単に彼の**王国のひとつの側面**である。「主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」今度は、

これは**異邦人の救い**を意味している。「その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。」

そこには、教え、癒し、助けつつ、人々の間に**一人の人間として**歩き回られた**ナザレ出身の謙遜な預言者**についての言葉はない。そこには、私たちの間に肉をまとわれ、住まわれた**永遠で、先存在されていた神性を持たれるお方**についての言葉はない。そこには、**人の罪のための死を経験された謙遜なしもべ**についての言葉はない。すべての強調は、**彼の勝利的な支配—悪を征服し、全地の上に平和と義を確立すること—**の上に置かれている。

これは、確かにその箇所のみらかな意味である。そしてそれは、イエスのおられた時代のユダヤ人がそれをどのように理解したかである。**マカベア時代とその後継者(163-64 B.C.)の時代**において、ユダヤ人は**シリアの支配者(セルキヤ朝)からの独立**を達成した。そして再び彼らを統治する王とともに強力な**独立した民族**となった。しかし紀元前63年に、**ローマ帝国はポンペイウスという人物**がパレスチナまで鉄の腕を伸ばしてきた。そしてエルサレムを攻略し、多くのユダヤ人を殺害し、戦争の捕虜として多くの他の者たちをローマに送った。このときに、ある無名の作者がこれらの言葉を書き連ねている。

「主よ。ご覧ください。ダビデの子、彼らの王、彼らを引き上げてください。あなたがご覧になるとき、神よ、あなたはあなたのしもべイスラエルを統治される。彼を力を持ってお守りください。彼が不義な支配者を粉碎できるように。彼はエルサレムを破壊し、踏みにじっている諸国民からエルサレムを清めることができるように。賢明かつ正しく、彼は相続したものから罪人を突き放すでしょう。彼は陶器師の器のように罪人の誇りを打ち砕くでしょう。鉄の杖をもって、彼は彼らの存在を粉々に砕くでしょう。彼は彼の口の言葉をもって不敬虔な民族を滅ぼすでしょう。彼が叱責すると、諸国民は彼の前から逃げ去るでしょう。彼は彼らの心の思いのゆえに、罪人を非難するでしょう。彼らの真中で彼の時代の不義はなくなるでしょう。すべてが清められ、彼らの王が主に油注がれた方であるゆえに。

ソロモンの詩篇 17 篇 23 節 ff.]

この詩は、**油注がれた主—新約聖書時代における主なるキリスト—が打ち勝つ期待**を表現したものである。彼の主な役割は、**異教徒の憎むべきくびきから神の民イスラエルを解放**することである。

これは、ローマ帝国の権威の下でガリラヤを治めていたヘロデ・アンティパスに投獄されていた**バプテスマのヨハネの困惑**を理解できるようにしてくれる。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか」(マタ 11:2-3)。**メシヤの行為—それは何であったのか**。教え、病人の癒し、ハンセン病患者のきよめ、当時の宗教指導者たちの反感を買うことだったのか。しかし、これはメシヤがすべきものではなかった。彼は**敵国に挑戦**すべきであった。

彼は**悪しき者を殺害**すべきであった。ヘロデ・アンティパスが彼の兄弟の妻と公に姦淫の中に生きていたとき、彼はどのようにしてメシヤたることができたのか。彼は、その統治者、ポンテオ・ピラトがユダヤにおいて体現していた**ローマ帝国の支配に挑戦しなかった**。それで、イエスはどのようにしてメシヤたりうるのか。彼は多くの良いわざをなしていた。しかし**ダビデ的なメシヤに期待されていた行為はなにもなさらなかった**。ヨハネは彼の勇気を失わなかった。ヨハネは来るべき型を宣言するにあたり、彼に対する神の召命を疑わなかった。彼は「殻を消えない火で焼き尽くされます」(マタイ3:12)と、ヨハネは自分自身を名乗らなかった。彼の行為は**待望された王の行為ではなかった**ので、ヨハネはただ、イエスはどのようにしてメシヤたりうるのかを尋ねたのみであった。事実、イエスは神の目的における新しい啓示を体現者であった。彼は本当に、**ダビデ王たるメシヤ**であった。しかし彼の使命は、**ローマ帝国の支配からイスラエルを解放する—政治的メシヤ**であるよりむしろ**—罪の重荷から人々を解放する—霊的な使命**であった。

大変異なったメシヤ像が、ダニエル書七章のキリスト論において描かれている。ひとつの幻において、ダニエルは**海からのぼってくる四つの獣**をみた。それらは**四つの続いて起こる世界帝国**をあらわしていた。その後、ダニエルは彼の幻の中で、**座しておられる神とともにある天の御座**をみた。そのとき、世界帝国は破壊された。「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、**人の子のような方が天の雲に乗って来られ**、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は**永遠の主権**で、過ぎ去ることがなく、**その国は滅びることがない**。」(ダニエル 7:13-14)

この「**人の子のような**」人物はひとりの個人なのか、あるいは四つの獣のように、神の民を表している象徴なのかどうかは、私たちの議論においては重要ではない。それがどちらにしても、私たちは、あるユダヤ主義のサークルがこの人物を個人主義的な見地からこの人物を解釈しているのを今日の資料から知っている。人の子は、**神の臨在の中に保持されている天的な、先存在の、超自然的な人物**となる。神の定められた時に、彼は**死者をよみがえらせ、悪しき者を裁き、神の民を贖い、彼らを栄光の永遠の王国に集めるために来られる**。

強調されるべき第一の事柄は、これは**ダビデ的メシヤの概念**とは大変異なった概念だということである。確かに、私たちの資料源において二度、人の子はメシヤと呼ばれている。しかしこれは多様なメシヤ概念を合成したユダヤ主義において明らかな傾向を表している。そのメシヤは**ダビデの子**である。人の子は**超自然的存在**である。そのメシヤは、**人々の間のひとりの人**として起こされる。人の子は**天から来られる**。そのメシヤは**平和と義の地上の王国を統治**する。人の子は、**死者をよみがえらせ、変貌した地球上の栄光の王国を統治**される。それらの二つの人

物像はまったく別の種類である。そして少なくとも表面上はお互いに相手を排斥しあっている。

この背景において、私たちは、イエスがご自身の使命や奉仕を示すために「人の子」という用語を用い始められたとき、弟子たちの困惑ぶりを理解することができる。イエスが中風の男の罪を赦されたと宣告されたとき、ユダヤ人たちは、「神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。」(マルコ2:7)と、イエスが神を冒瀆する罪を犯されたと思った。イエスは答えて言われた。「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」こう言う前から、中風の人に、「あなたに言う。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい。」と言われた(マルコ2:10-11)。再び、彼と彼の弟子たちが安息日に麦の刈り入れをしたと非難されたとき、彼は言われた。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたのではありません。人の子は安息日にも主です」(マルコ2:27-28)

そのような言葉は、大変困惑させるものだった。イエスはどのようにして人の子でありうるのか。人の子は、栄光の王国を治める先存在の、天的な存在だった。すべての人は、イエスがナザレ出身の大工の息子であると知っていた。彼が、人の子と共通しているものは何であったのか。

後に、イエスはよりダニエル書の預言のようであるたくさんの言説を語られた。「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます」(マルコ8:38)。「そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。そのとき、人の子は、御使いたちを送り、地の果てから天の果てまで、四方からその選びの民を集めます」(マルコ13:26-27)

この言葉は弟子たちに意味をなした。神の国に神の民を集めるため、力とおおきな栄光とを伴った雲に乗って来られる天的な人物—彼らが理解したものはこれである。しかし、そのような天的な人物像がイエスとともにしなければならないことは何か。イエスはナザレ出身の大工の息子だった。彼が人の子と共通して持っているものは何か。そしてそれぞれの人物がダビデ的な王と共通して持ち得ているものは何か。

しかし、これはすべてではない。メシヤの諸側面のひとつを伝えている旧約聖書の第三の人物像—苦難のしもべがある。彼は、イザヤ53章に描写されている。彼は謙遜で、受け身である。「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」彼は痛めつけられ、苦難によりひどく傷つけられた。「彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえも

ない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。」彼は若死にしなければならなかった。「彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。」しかしながら、彼の苦難は不当なものであり、身代わりであった。彼は彼の民の罪のゆえに苦しんだ。「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」「主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」「彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ」「彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとする」「わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。」「彼は多くの人々の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。」

この偉大なる章において留意すべき最初の事柄は、苦難のしもべはメシヤと同一視されてはいない。彼は油注がれた者とも呼ばれていない。ダビデの家系との関連もない。事実、その章への序曲において(52:13)、彼は単に神のしもべと呼ばれているだけである。「見よ。わたしのしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。」この章が見られる脈絡において、そのしもべはしばしばイスラエルと同一視されている。「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現わす」(イザ49:3)。「主が、そのしもべヤコブを贖われた」(イザ49:3)。「わたしのしもべヤコブ、わたしが選んだイスラエルのために、わたしはあなたをあなたの名で呼ぶ」(イザ45:4)。あなたはわたしを知らないが、わたしはあなたに肩書を与える。再び、そのしもべは不信仰なイスラエルを贖われる方である。「今、主は仰せられる。イスラエルをご自分のもとに集めるために、私が母の胎内にいる時、私をご自分のしもべとして造られた」(イザ49:5; 49:6もまた見よ)。そのしもべの概念は、集合的な概念イスラエルとイスラエルを贖う個人との間を揺れ動いているように思われる。

しかしながら、以下の事実は残っている。イザヤ53章の苦難のしもべは、ダビデ的・メシヤ的王や天的な人の子以外のだれかであることは明らかなように思われる。メシヤはどのようにして、彼の口の鞭をもって地を打ち負かし、彼の唇の息をもって悪しき者を殺すと同時に、打ち負かされ、無力でなされるまま死に至らされる人物でありうるのか。その三つの旧約聖書のメシヤ的思想を統合しうるのは、イエスの使命のみである。

弟子たちがイエスのメシヤ性を理解するのに時間がかかったことに驚かないでほしい。以下のことが、すべての弟子を代表する代弁者としてのペテロが、イエスのメシヤ性を理解したときの、ピリポ・カイザリヤにおけるペテロの告白の意味である。イエスは支配者としてダビデ的王のように行動されていない、彼はそれにもかかわらず旧約聖書的希望であるメシヤが職務を遂行しておられると語っている

ことを意味している。わずかなパンと魚をもって五千人を養われた奇跡の後、無理やりイエスを連れて行き、彼を王にする民衆の動きが起こった(ヨハネ6:15)。実際に、ここで神的なものを付与された人物となられた。彼にわずかな刀と槍を提供しえたなら、彼はそれらを増やすことができるので、ひとつの軍隊をすら用意することができた。ピラトの軍隊は彼の前に立ち向かうことはできなかったであろう。しかしながら、このようなことは、イエスの現段階での使命ではなかった。人の子として、彼は苦難のしもべとして来られた。そしてこの苦難の使命の後においてのみ、天的な人の子となられうるのであった。イエスは、ピリポ・カイザリヤの後、ただちにこの事実を彼の弟子たちに教え始められた。彼は本当にメシヤであり、ダビデ的王である。しかしダビデの王座から支配することは現段階における彼の使命ではなかった。「それは、イエスは弟子たちを教えて、『人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる。』と話しておられたからである』(マルコ9:31)。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」(マルコ10:45)。この時点では、弟子たちはまだ準備ができていなかったことを物語っている。イエス在世当時のユダヤ人が、イザヤ53章をメシヤ預言として解釈していたという証拠は存在しない。本当に、その二つの概念は、お互いに排他的であるように思われる。神の栄光の王国において支配するよう運命づけられている、天的・超自然的な人の子が、どのようにして、彼の敵によって謙遜で従順で、嘲られ拷問を受けられ、ついには死に至らされうるのであるのか。それは不可能なように思われる。

しかし、ここにまさに私たちの基本的な解釈法が存在する。イエスと彼の後継の使徒たちは、旧約聖書の預言をイエスの人格と使命の視点から再解釈した。人の子は、彼が栄光に入る前に、地上に現れなければならない。そして、彼の地上における使命は、苦難のしもべの役割を成就することであった。

この再解釈は、イエスの教えに限られているわけではない。それは、同様に思いがけない形で使徒たちによってさらに促進されている。ペンテコステの日に、ペテロは驚くべき説教を語った。彼は、旧約聖書のコンテキストにおいて、死は存在の終わりではないというダビデの望みについて語っている詩篇16:8-11と132:11からの聖書箇所を再解釈した。

ここに、旧約聖書の預言の驚くべき再解釈がある。詩篇110:1-2における約束、「主は、私の主に仰せられる。『わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。』」は、次の節が証明しているように、「主は、あなたの力強い杖をシオンから伸ばされる。あなたの敵の真中で治めよ。」(詩篇110:2)とエルサレムにおける王位に言及している。靈感の下で、ペテロはダビデの王位をエルサレムにおけるその地上的位置から、天上的位置に移転している。

この節は、天にある神の右の座にあるイエスの勝利の期間を主張するヘブル人への手紙の著者に使用されたお気に入りの節となった(ヘブル1:13, 10:12,13)。ペテロの要約された主張である「神が、今や主ともキリストともされた」(使徒2:36)は、同じ真理を主張している。「主」は絶対的な統治を意味している。「キリスト」はメシヤあるいはダビデ的王を意味している。彼の復活と昇天によって、イエスは彼のメシヤ的支配に入られた。「キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです」(I コリント15:25)。「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである」(黙示録3:21)。主と王が基本的に交換可能な用語であるということは、「なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。」と征服される小羊について語られている黙示録17:14において証明されている。彼の復活と昇天において、イエスは彼のメシヤとしての新しい経験に入られた。地上において、彼は柔和で謙遜な苦難のしもべであられた。彼の苦しみは過去のものとなった今、彼は彼のメシヤ的支配に入られた。そして彼はすべての敵が足の下に置かれるまでその支配を続けられるであろう(I コリント15:25)。このメシヤ的支配の特徴は、旧約聖書には予知されていない。そこには、彼の支配はエルサレムからであり、エルサレム一帯に対して「主はダビデに誓われた。それは、主が取り消すことのない真理である。『あなたの身から出る子をあなたの位に着かせよう』(詩篇132:11)である。新約聖書においては、彼の支配は天からであり、その視野においては全世界が対象である。

キリスト論におけるこの遊覧は、私たちが取り組んできた-すなわち旧約聖書の預言書はイエスの人格と使命における成就の視点において解釈されなければならないという-主眼点を証明していると確信する。私たちは、これが再解釈を含んでいることを見てきた。ときどき、その成就是私たちが旧約聖書から期待するものとは異なっている。

換言すれば、キリスト論であるか終末論であるかは別にして、教理における最終的な言葉は、新約聖書の中に見いだされなければならないということである。

[ICI](ge_lt_02)★ Biblical_Theology_ by Aguro ★

One More Paragraph!

—聖書神学的瞑想のひとつ—

PW:1551

こんにちは、関西聖書学院神学教師、一宮基督教研究所の安黒務です。今日は、ジョージ・エルドン・ラッドの「最後の事物」の第二章「イスラエルについてはどうか」を学んでまいりましょう。

【 テキスト 】

最初の章において、私たちは**聖書解釈の原則**を確立した。旧約聖書は**イエス・キリストにおいて与えられた新しい啓示の視点**において解釈されなければならない。では、新約聖書はイスラエルについて何を教えているのか。もし旧約聖書が**イスラエルの未来の救い**を見ているとしたら、新約聖書は、それらが**教会において靈的に成就されるべきである**として**根本的にそれらの預言を再解釈**しているのか。あるいは、神はまだ彼の民**イスラエルのための未来**を用意しておられるのか。

私たちが、**靈感された聖書**の中に、**ローマ人への手紙9-11章**にこの主題についての長文の議論を持っていることは幸運なことである。パウロは最初に彼の肉における同胞に対する心底からの関心と愛を表現している。彼は、彼らが彼らのメシヤとしてのイエスを拒絶したゆえに、イスラエル民族に対して「私には**大きな悲しみ**があり、私の心には**絶えず痛み**があります」(ローマ9:2)と語っている。

彼の最初のポイントは、「**イスラエル**」である。つまり、**真の靈的イスラエル—神の民—**は、**アブラハムの肉の子孫と同一ではない**ということである。「なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではないからである。パウロはこのことを証明するために**旧約聖書の歴史**を思い起こしている。アブラハムには**二人の息子、イサクとイシュマエル**があった。しかしながら、イシュマエルの家族と彼の子孫はアブラハムの**自然的子孫**であるが、彼らは**靈的子孫**には含まれない。「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」(ローマ9:7)。「すなわち、**肉の子ども**がそのまま神の子どもではなく、**約束の子ども**が子孫とみなされるのです」(ローマ9:8)。神はイサクを選び、イシュマエルを拒絶された。それゆえ、アブラハムの真の子孫—**真のイスラエル—**は、**生来の肉的血統においては決定されず、神の選びと約束によって決定される**のである。

その意味は明らかである。パウロのいた当時の**すべてのユダヤ人**が神の民「イ

スラエル」と呼ばれるわけではなく、**ただアブラハムの信仰に習う人々のみ**が神の民「イスラエル」と呼ばれるのである。そしてそのようにして、彼ら自身は**約束の子供**であると分るのである。

この原則は、すでにローマ人への手紙のはじめに系統立てて述べられている。ローマ2:28-29において、パウロは「**外見上のユダヤ人**がユダヤ人なのではなく、**外見上のからだの割礼**が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、**文字**ではなく、**御霊による、心の割礼**こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。」と書いている。

この**霊的割礼**対**肉的割礼**の原則は、パウロのオリジナルではない。彼は、すでに**旧約聖書において見出されていた主題**を繰り返しているのである。「ユダの人とエルサレムの住民よ。主のために**割礼を受け、心の包皮を取り除け**。さもないと、あなたがたの悪い行ないのため、わたしの憤りが火のように出て燃え上がり、消す者もないだろう」(エレミヤ4:4)。モーセの律法への**外側の従順**は、神の愛顧を確かなものとする**アブラハムの真の子孫**をつくらない。そこには調和する**心**—そして**生活**—がなければならない。さもなければ、彼は神の怒りと直面することになるであろう。

この原則は、ヨハネの黙示録の二つの節において適用されている。ヨハネは、「**ユダヤ人だと自称**しているが、実はそうでなく、かえって**サタンの会衆**である」(黙示録2:9, cf. 3:9)と話している。ここに、ユダヤ人であると(正しく)主張する人々がいる。彼らは**肉において**、また**宗教的にユダヤ人**であるが、ヨハネは彼らが彼らのメシヤとしての**イエスを拒絶し、イエスの弟子たちを迫害**しているゆえに、彼らは**霊的にユダヤ人ではなく、実際はサタンの会衆**であると言う。

次に、パウロは、もしこのことが本当であるとしたら、それは神の側の身勝手な行為を反映しているとの反対にまみえる。パウロは激しい言葉で答えている。**神は神**である。**人間の創造者**である。そして神はご自身の創造物を**どのように扱うかについて権利**をもっておられる。「しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、『あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。』と言えるでしょうか。陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか」(ローマ 9:20-21)。この節は、しばしば**個人の救いに対する神の選びと拒絶の視点**から解釈される。しかしながら、個人にどんな適用がなされているとしても、パウロの思想は**第一義的には贖罪の歴史とアブラハムに与えられた約束の子孫ヤコブに対する神の選び**についてのものである。「それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためになのです」(ローマ 9:23)と神は文字上のイスラエルの反逆や背教に多くの忍耐をもって耐えられた。神は文字上のイスラエルの不信仰に忍耐してこられた。つまり、その忍耐を通し

て神は真のイスラエルに憐みを示されたのである。「では、尋ねましょう。彼らがつま
ずいたのは倒れるためなのでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、彼
らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起
こさせるためです。」とパウロはこの箇所の後者の思想を取り上げている。神は**イスラ
エルのつまづきと不信仰の中に目的**をもっておられる。それは、神が忍耐をなくされ
るようになったとか、イスラエルの墮落がそれ自身を目的として起こったのではなかつ
た。むしろ、神は**イスラエルの墮落を異邦人に救いをもたらすために用いられた**ので
ある。

パウロは、「神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです」(ローマ 9:24)。神の裁きの下に立つ怒り
の器に取って代えて選ばれた「あわれみの器」は、ユダヤ人と異邦人からなる混合の
社会である。それから、パウロは驚くべきことをなしている。彼は、旧約聖書の文脈に
おいてイスラエルに言及されているホセア書から二つの箇所を引用し、それらを大部
分が異邦人からなるキリスト教会に適用している。「それは、ホセアの手紙でも言っ
ておられるとおりです。『わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛
する者と呼ぶ』」(ローマ 9:25)。

ホセアは、イスラエルの霊的姦淫を象徴している姦淫の女をめとるように
主に命じられた。二番目の子供は女の子であった。そしてホセアは「その子をロ・ルハ
マと名づけよ。わたしはもう二度とイスラエルの家を愛することはなく、決して彼らを赦
さないからだ」(ホセア 1:6)。

しかしながら、イスラエルに対するこの拒絶は最終的なものでも、回復不可能なもの
でもない。事実、ホセアは神の国におけるイスラエルの未来の救いを断言し続けてい
る。ホセアは、暴力が動物王国から取り除かれる日を見ている。神は野の獣、空の鳥、
地を這うものとの契約を結ばれる。彼は、暴力と戦争の武器、弓と剣、いやそれどこ
ろか戦争そのものをなくされる。イスラエルは地に安全に住み、彼女は安らかにふす。
「わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契り
を結ぶ」(ホセア 2:19)。それから、ホセアは言う。「わたしは『愛されない者』を愛し、『わ
たしの民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ』」(ホセア
2:23)。

さて私たちは、私たちがキリスト論でみた同じ現象を終末論の領域でももっている。
旧約聖書の諸概念は、根本的に再解釈され、予見されていなかった適用を与えられ
ている。旧約聖書において、文字通りのイスラエルに適用されているものが、ローマ
9:25においてユダヤ人だけでなく異邦人からもなっている教会に適用されている(ロー
マ 9:24)。新約聖書の教会で構成上優位を占めているのは異邦人である。

パウロは、再びホセアから引用している。「『あなたがたが、わたしの民ではない。』
と、わたしが言ったその場所で、彼らは『生ける神の子ども』と呼ばれる。」(ローマ

9:26)。ホセアは、息子である第三の子供をもった。そして「その子をロ・アミと名づけよ。あなたがたはわたしの民ではなく、わたしはあなたがたの神ではないからだ」(ホセア 1:9)。

この場合、ホセアはただちにイスラエルの未来の救いを知らせることに移行している。「イスラエル人の数は、海の砂のようになり、量ることも数えることもできなくなる。彼らは、『あなたがたはわたしの民ではない』と言われた所で、『あなたがたは生ける神の子らだ』と言われるようになる」(ホセア 1:10)。

さて、二つの別々の場所において、それらの旧約聖書の文脈において、文字通りのイスラエルに言及している預言は、新約聖書において(異邦人)教会に適用されている。換言すれば、パウロは教会の中に、ホセア 1:10 と 2:23 の霊的な成就を見ている。異邦人教会の救いは、イスラエルになされた預言の成就であるという結論を避けることができない。このような事実が、現著者を含み、聖書学生に、教会を新しいイスラエル、真のイスラエル、霊的イスラエルとして話すよう強いているものである。

この結論は、パウロがキリスト教信仰者を(霊的な)アブラハムの子どもと語っている箇所によって支持されている。「彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです」(ローマ 4:11-12)。さて、アブラハムはユダヤ人信仰者と異邦人信仰者の父と言われている。ユダヤ人であるとかギリシャ人であるとかは関係なく、信仰者がアブラハムの真の子ども一真の霊的イスラエルであるというのが、避けることができない結論である。私たちは再び、ローマ 2:28-29 を思い起こす。真のイスラエルとは、心の内で割礼を受けた人々である。

ローマ 4:16 においてパウロは再び「アブラハムは私たちすべての者の父なのです」と繰り返している。ガラテヤ人を書いたとき、パウロはすでにこの真理—「ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい」(ガラテヤ 3:7)と明言している。

ディスペンセーション主義者にとって、“霊的”解釈は、旧約聖書を解釈する上で最も危険なこととみなされている。ジョン・ウォルブード教授は、これは現代のローマ・カトリック、現代のリベラル派、現代の非ディスペンセーション保守の著者を特徴づけている解釈であると書いている(The Millennial Kingdom, Dunham, 1959, 71)。現著者は、彼は旧約聖書において文字通りのイスラエルに言及されている約束を、新約聖書は霊的教会に適用しているのを見出すのだから、霊的解釈を採用しなければならないと感じる。彼は、このことをある先入観をもった契約神学のゆえにではなく、彼は神の言葉に縛られているゆえにこのことをするのである。

それで、教会が真の霊的イスラエルであるのなら、「神はご自分の民を退けてしまわれたのですか」(ローマ 11:1)―文字通りのイスラエルを？パウロはこの問いにかなり詳しく答えていこうとしている。彼は、ローマ 11:5 で「もし彼ら(文字通りのイスラエル)の捨てられることが世界の和解(異邦人の救い)であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう。」と彼らの未来の救いを暗示している。

パウロは、さらに進んで、このことを有名なオリーブの木のたとえで例証しようとしている。オリーブの木は、その全体においてみられる神の民である。栽培種の枝(ユダヤ人)が彼らの栽培種の木から切り取られ、野生種のオリーブの枝(異邦人)が栽培種のオリーブの木に接ぎ木された。しかし、栽培種の木に野生種の枝が接ぎ木されると誰が聞いたのか。パウロはこの問題を知っている。というのは、彼がそれは「もとの性質に反して」(ローマ 11:24)と語っているからである。パウロは、イスラエルに取って代えられた異邦人にイスラエルに対して誇ってはならないと警告している。それは神は再び彼らを切り取ることもできるからである。同様に、「彼ら(ユダヤ人)であっても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わせる事ができるのです。もしあなたが、野生種であるオリーブの木から切り取られ、もとの性質に反して、栽培されたオリーブの木につがれたのであれば、これらの栽培種のもの、もっとたやすく自分の台木につがれるはずです。」(ローマ 11:23-24)。

その後、パウロは壮大な陳述によって全体の状況を要約している。「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。

『救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である』(ローマ 11:25-27)。

ここには贖罪の歴史における聖定がある。栽培種のオリーブの木の栽培種の枝、不信仰のゆえに切り落とされた栽培種の枝、もとの性質に反して接ぎ木された野生種の枝、オリーブの木にまだ再接ぎ木されていない栽培種の枝。イスラエルはつまづきの岩―キリスト―に躓いた。しかし彼女はいつまでも倒れたままではない(ローマ 11:11)。パウロが「イスラエルはみな救われる」と語ったとき、彼は明らかに、かつて生きていたすべてのユダヤ人を意味しているということではない。彼は贖罪の歴史について語っている。しかし、生きているユダヤ人の大多数、すなわち「イスラエルはみな」救われる日が訪れる。

私たちは、パウロがイスラエルの救われ方についてもっと詳しく書いてくれてい

たらと願う。「救う者がシオンから出て」という言葉が、キリストの再臨に言及されるのもっともである。再臨の目的のひとつは、キリストのもとへ教会を連れゆくこととともに、イスラエルを贖うことである。

しかしながら、二つの事柄が明白である。イスラエルは教会と同じ方法—信仰が彼らのメシヤとしてのイエスに向けられることにより、救われなければならない(ローマ 11:23)。イスラエルが経験する祝福は、教会が経験している同じ祝福—キリストにある祝福である。

そのとき、神殿再興についての旧約聖書の約束はどうなるのか。ヘブル人への手紙は、律法には「後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はない」(ヘブル 10:1)と語ることより、この問いにはっきりと答えている。その神殿と犠牲の制度をもつ律法は、キリストにある私たちにもたらされた祝福—実体—の単なる影にすぎないのであった。影はその目的を達成した。キリストは今、私たちの大祭司として仕えておられる天にある真の幕屋に入られた。神の贖罪の計画が影の時代に逆戻りするという事は、思いもよらないことである。

実際に、ヘブル人への手紙はきつぱりとこのことを断言している。ここで私たちは「しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。もしあの初めの契約が欠けないものであったなら、後のものが必要になる余地はなかったでしょう」(ヘブル 8:6-7)を読む。強調されるべきポイントは、ヘブル人への手紙はモーセの契約とキリストにおいてなされた新しい契約を対比させているということである。

ヘブル人への手紙は、エレミヤ 31:31-34 から長い引用によってこのことを証明している。

新改訳改訂第3版

エレ

31:31 見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。

31:32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——【主】の御告げ——

31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

31:34 そのようにして、人々はもはや、『【主】を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを

知るからだ。——【主】の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」。

ここで、私たちは、私たちがすでに直面してきた事象に再び遭遇している。二つの新しい契約があると信じることは大変困難である。ひとつの契約はキリストにより彼の血を通して教会となされ、もうひとつの契約はディスペンセーション主義者によれば、大部分はモーセの契約の更新である、イスラエルとなされる未来の新しい契約である。確かに、私たちはすでにローマ 9-11 章において、パウロが、文字通りのイスラエルはまだ新しい契約の内に入れていない、しかしそのことがなされる方法は、十字架を通して教会となされたのと同じ新しい契約である、と教えているのを見てきた。それは別個の契約ではない。ヘブル人への手紙 8 章は、エレミヤを通してなされた約束を、キリストによって彼の教会となされた新しい契約に適用している。

このことは、第二の箇所において二重に明確にされている。ヘブル人への手紙 10:11-17 は、罪のための十字架上のキリストの犠牲、次の神の右への着座、「それから、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです」（ヘブル 10:13-14）と語っている。それらの言葉は、ヘブル人への手紙がキリストによって教会となされた契約について語っていることを明々白々にしている。それから、ヘブル人への手紙は、再びエレミヤ書 31 章を引用している。

10:16 「それらの日の後、わたしが、彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、主は言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いに書きつける。」またこう言われます。

10:17 「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」

10:18 これらのことが赦されるところでは、罪のためのささげ物はもはや無用です。（ヘブル 10:16-18）

エレミヤ 31 章の新しい契約がキリストにより彼の教会となされた新しい契約であることを、誰かが否定しうるかをみることは困難である。

私たちがちょうどヘブル人への手紙から引用した箇所は、赦されるところでは、罪のためのささげ物はもはや無用であると語っている。キリストによって成し遂げられた赦しは、モーセの制度を無用、かつ廃止されたものとしている。ヘブル人への手紙は、8:13 において同じ真理を「神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いとされたのです。年を経て古びたものは、すぐに消えて行きます」と断言している。それらの言葉が紀元七十年のローマ人によるエルサレムの破壊

の史実に言及しているのかどうかは分からないが、それらは少なくとも贖罪の実体をもたらされたのだから、古いモーセの秩序の消滅を断言している。

ここに再び私たちは、神殿と犠牲の制度を伴ったモーセの契約の一時性について語っている旧約聖書預言書の根本的な再解釈を手に行っている。ヘブル人への手紙の議論は、それらがキリストにおいてもたらされた霊的実体を指し示している予型であり影であるということである。予型や影がそれらの目的を達成するやいなや、それらは神の贖罪のプログラムから無用のものとして捨てられる。

このことが、現在のイスラエルの問題にどんな関わりがあるのか。三つのかかわりがある。第一に、神は彼の民を保護されてきた。イスラエルは「聖なる」民(ローマ 11:16)のままであり、神の目的を遂行するよう運命づけられている。第二に、すべてのイスラエルはまだ救われているわけではない。ある今日の学者は、千年王国において、歴史は初めて真のキリスト教民族を証しするかもしれないと示唆している。第三に、イスラエルの救いは、モーセの犠牲の制度の再興を伴うユダヤ人の神殿の再建を通してではなく、キリストの血において、すでに教会と制定された新しい契約を通してなされなければならない。ヘブル人への手紙は、モーセのすべての制度は廃止され、消え去ったときぱりと断言している。それゆえ、イスラエルは「預言の時計」であるとする大衆向けのディスベンセーションの見解は間違っている。ことによると、パレスチナへのイスラエルの今日の帰還は、イスラエルに対する神の目的の一部分かもしれない。しかし、新約聖書はこの問題の解明になんの光も投げかけていない。しかしながら、世紀を通してひとつの民族としてのイスラエルの保持は、神が彼の民イスラエルを見捨てられていないという一つのしるしではある。

[ICI](gel_lt_09)★ Biblical_Theology_ by Aguro ★

One More Paragraph!

—聖書神学的瞑想のひとつ—

PW:0829

こんにちは、関西聖書学院神学教師、一宮基督教研究所の安黒務です。今日は、ジョージ・エルドン・ラッドの「最後の事物」の第九章「神の国」を学んでまいりましょう。

【 テキスト 】

私たちはすでにキリストの再臨の章において神の国の神学にふれる機会をもった。そこで私たちは、神と人間をみる根本的な聖書の方法が、人間は地上に住むように創造され、神は幾度も救いまた裁きのために歴史の中にある人間を訪れられたということである発見する。ナザレのイエスの使命は、そのような神の訪れに他ならない。しかしながら、この訪れは隠されたものだった。イエスは歴史の中にある人間に神の国の祝福をもたらすために、肉体をもつ死すべき人間として受肉された。しかしながら、彼の使命と目的は信仰者にだけは明らかであった。多くの他の人々には、彼は気が狂っているかのように思われた(マルコ 3:21)。彼の再臨は、まさに今彼のものである統治権を全世界に示すために絶対に必要である。この章において、私たちはこの神の国の神学を詳述する。

神の国がイエスの教えの中心的な主題であることは明らかである。マタイはこのことを明らかにしている。マタイは、イエスの初期の奉仕を「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え」(マタイ 4:23)という言葉で要約している。山上の垂訓は、天の御国がその主題である(マタイ 5:3,10)。大いなるたとえ話の章は天の御国を扱っている(マタイ 13:11)。イエスの弟子たち間の交わりの章は、実際に天の御国の交わりについてである(マタイ 18:1-4)。オリーブ山での講話 は王国の到来を扱っている。

この主題をより正確に理解するために、私たちは特別な言葉、アイオン(aion)を考察しなければならない。ギリシャ語の新約聖書に、英語で「世界」(world)と翻訳されている二つの言葉—コスモス(kosmos)とアイオンが存在する。これは粗雑な翻訳であり、きわめて価値ある真理を読者に見えないようにしている。コスモスは「秩序だてられた全体」を意味している。それは、それは、全体としての宇宙、全体としての人間、また神に対する罪深い反逆においてみられるものとしての人間について使用されうる。英語の「アエオン」を語源とするアイオンは、明確に時間的用語であり、不確定な長さの時間を意味する。ギリシャ語には「永遠」を意味す

る言葉がなく、エイス トン アイオナ(時代もしくは世へ)という簡単な言い回しが使用されている。

この言葉が福音書で見いだされる最も重要な場所は、マルコ 10 章である。金持ちの青年がイエスのもとにやって来て、永遠のいのちを得るために何をすべきかを尋ねた(マルコ 10:17)。永遠のいのちにおいて、彼はあらゆる預言者が予期していた終末論的神の国のいのちを意味した。彼の求めの背景は、旧約聖書において「永遠のいのち」という表現が見出される唯一の箇所であるダニエル 12:2 であった。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに」(ダニエル 12:2)。青年は、どのようにしたら彼自身が復活にあずかり、神が完全に支配される新しい世界に加えられることを確信できるのかを尋ねてきた。イエスの答えは彼を満足させるものではなく、彼は去っていった。そのとき、イエスは弟子たちに「裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。」(マルコ 10:23)言われた。そして、イエスは再度「神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。」(マルコ 10:24)と言われた。

私たちはここで明瞭にするために挿入的注釈を加えるべきである。マタイにある並行箇所には「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです」(マタイ 19:23)という有名な不一致の言葉がある。「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」(マタイ 19:24)。最初の箇所において、マタイは「天の御国」を使用し、第二の箇所では「神の国」を使用している。そこには何か違いはあるのだろうか。

もちろん、だれもそれらの二つの箇所を区別することはできない。マタイが天の御国を使用している最初の箇所において、マルコは神の国を使用している。それらのテキストの中に見出される相違点はテキスト自身から読み取られなければならない。それはテキストから推論することはできない。しかしながら、ディスペンセーション主義者は神学全体をそれらの二つの聖句の間に示唆されている相違に基礎づけている。

それで、私たちはその相違をどのように説明するのか。「天」という用語は、ユダヤ人の「神」という用語の自然な代用語であるという、単純な歴史的事実によって説明できる。ユダヤ人はきわめて敬虔な民であり、神の名前に対してはさらに最高の敬意を払った。例証すると、放蕩息子が家に帰ってきたとき、彼は「立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。」(ルカ 15:18)と言った。イエスご自身も、この最高の敬意を表現された。サンヒドリンで、彼は「今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります」(マタイ

26:64)と話された。マタイは、「天の御国」という言い回しを使用している唯一の福音書である。彼はユダヤ人読者に向けて書いており、このことは彼らの嗜好に適合した。しかしながら、彼が「神の国」という用語を使用している四つの場合に関しては、そのように私たちはそれから独立した慣例とすることはできない。

私たちの主題に戻ると、金持ちの青年の支配者は、彼が終末論的ないのちを得るために何をしなければならないのかを尋ねた。イエスは神の国、また天の御国に入ることについて話すことによって答えられた。永遠のいのちに入ることは神の国に入ることと同じ意味であり、両方とも終末論的な秩序に属する。

このことは、彼が「この時代において」物質的な損失や苦難を受けた者は皆、彼らの仲間入りをする祝福を見出し、「後の世では永遠のいのちを受ける」(マルコ 10:30)と語っているマルコ 10:29-30 においてさらに明確にされている。

二つの時代についての同じ神学が、「この世の子らは、めとったり、とついたりするが、次の世に入るのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません。彼らはもう死ぬことができないからです。彼らは御使いのようであり、また、復活の子として神の子どもだからです」とルカ 20:35-36 において見出される。この時代は死すべき人間と死の時代である。結婚は欠くことができない制度なのか、あるいは人類は死に絶えることになるのか。来るべき時代は、死者の復活によって開始される。そしてそれを経験する人々は、彼らがその後は、永遠のいのちをもつ復活の子らであり、不死であるという点において天使のようである。

大いなる例話の章は、後の世に導き入れるもう一つの出来事が、(この)時代においては群生している良い種と毒麦が分けられる収穫のときである最後の審判であることを明確にしている(マタイ 13:39-40,49)。「永遠」を意味する神学的内容なしに、二つの時代という熟語が使用されている幾つかの他の箇所として、たとえば、マタイ 12:32「また、人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません」がある。パウロにも、キリストは「すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました」という同じ表現がある(エペソ 1:21)。

今の世の特徴について語っている幾つかの他の箇所がある。マタイ 13:22 では「この世の心づかい」が神の国の言葉に敵対し、その成長をふさごうとしている。ガラテヤ 1:4 では、パウロはそれを「今の悪の世」と呼んでいる。Ⅱコリント 4:4 で、パウロはサタンをこの世の神と語っている。神の主権的知恵において、神はサタンが、不敬虔な人々の究極的な礼拝の対象として一この世の神とした語られるそのような力を行使することを許容されている。もちろん、サタンがなすすべての事柄は、神の主権的力と承諾をもってなされる。

この時代のもうひとつの悪は、「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、」(ヘブル 2:14)とあるように死である。

新約聖書からのそれらの箇所すべてにおいて、私たちは旧約聖書の預言者の特徴づけている同じ神学を見出す。それは、きわめて単純に図示することができる。

| | | |
|----|-----|--------|
| 創造 | この世 | 来るべき世 |
| | 死 | 永遠のいのち |
| | 主の日 | |

贖罪史の発展の全体は、主の日において区別された二つの時代に分けられる。新約聖書では、この図表に、主の日は御子の来臨、死者の復活、人に対する審判を証しすると、幾つかの重要な特色が加えられている。

これは、パウロによって、彼がキリストの勝利的支配に言及しているときに強調されている。「しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。最後の敵である死も滅ぼされます。」(I コリント 15:23-26)と、パウロは語っています。さて私たちは神の国の定義となるものを手にしている。神の国とは、彼の敵を滅ぼし、暗に彼の民に彼の支配の祝福をもたらすキリストにある贖罪的支配である。

このことは、不可避的に幾つかの結論に導く。神の国は、人間のわざではなく、神のわざである。私たちは、神の国を建て上げることについて、あるサークルにおいてしばしば使用されている、その表現をどこにも見出すことができない。確かに、彼らは神の国のわざを宣言しているかもしれない(マタイ 24:14、使徒 8:12、28:31)。しかし王国はいつも変ることなく神の国、神の支配である。さらに、神の国はこの世においては勝利しないことも明らかである。この世は、悪が人の子により彼の王国から一掃されるまで、悪は残存する。またさらに、このことは、キリストの再臨が、彼の勝利の再臨は別にして、罪・サタン・死に対する最終的な勝利ではないという、聖書神学に欠かすことができないものであるのかを示している。しかしながら、神の国は確実に到来する。神の約束のすべてはキリストの再臨とは別に依然として達成されていない。最終的に、神の国についてのこの神学は、神の贖罪の目的は単に個々の魂の救いの道の提供ではないことを明確にしている。

それは、歴史のひとつの目的なのである。私たちは、すでにキリストの再臨の章においてこのことを明確にした。神はすでに歴史に干渉されてきたゆえ、歴史はひとつの目的とひとつの目標をもっている。むしろ私たちは、「贖罪的」歴史は、神の国というひとつの目的と目標をもっているというべきである。

私たちは、王国の終末論的側面を離れる前に、私たちは手短に多くの論争されてきた一いつ、どのように神の国は到来するのか。「いつ」ということにおいて、私は日時を推定するものとして「いつ」を意味しているのではなく、その出来事が贖罪の歴史の強調においてどこに置かれるべきなのかをという問題点を考察しなければならない。

私たちは、ここまで引用したすべての聖書箇所において、終末的な王国は、主の日、人の子の来臨、死者の復活、最後の審判からなる単一の複合的出来事によって開始されるように思われる、ということを率直に認めなければならない。

しかしながら、もっぱらこの主題に集中して書かれている一冊の文書であるヨハネの黙示録において、この時間的構成は修正されている。再臨において、単一の大きい出来事において生起するキリストの勝利の代わりに、黙示録 20 章は、サタンに対する勝利を二段階で生起するものとして描いている。

私たちが前の方の章で見えてきたように、キリストと彼の教会に反対している悪魔的な悪の力は終わりの時に、聖徒の殉教者を傷つける力をもっているが、しかし反対に聖徒たちのキリストへの忠実さによって打ち負かされる、反キリストにおいて具現される。黙示録 19 章は、キリストの再臨を描いている。

強調は、全体的に反キリストに勝利し、滅ぼす、彼の能力の上に置かれている。戦闘において馬に乗る戦士として描かれている。反キリストにおける獣と偽りの預言者は、硫黄で燃えている火の池に生きたまま投げ込まれる(黙示録 19:20)。その後、預言者は彼の注意を反キリストの背後に立っている権力者—サタンに対するキリストの征服に向ける。彼はまず天使によって捉えられ、大きな鎖で縛られ、それが諸国の民を惑わすことのないように(黙示録 20:3)底知れぬところに投げ込まれる。この監禁状態は一千年間続く。同じ時、ヨハネは反キリストの前に犠牲となった殉教者の魂をみている。「彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。」(黙示録 20:4-5)。一千年の終わりに、サタンは彼の牢獄から解放され、キリストご自身が一千年間彼らを支配された事実にも関わらず、人々の心が依然として罪深く、反抗的であることを見出す。彼らは天からの火によって滅ぼされる。それから、第二の復活が描かれている。「その他の死者」(黙示録 20:5)、つまり第一の復活にあづかれなかったすべての人は審判のためによみがえらされる。彼らは神の玉座の前に立ち、彼らが行ったわざに従って裁かれる。しかし、それだけではない。「いのちの書に名のしるされていない者はみ

な、この火の池に投げ込まれ」(黙示録 20:15)る。この時点において、キリストの勝利は完全なものとなる。悪魔は、彼がキリストに反抗する軍隊を率いてくるとき、火の池に投げ込まれる(黙示録 20:10)。今や裁きは完結し、「それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である」(黙示録 20:14)。

この箇所を基盤として構築された神学は、それが来るべき時代が開始される前、歴史の中で一千年間のキリストによる地上支配を予期しているゆえに、千年王国主義あるいは至福千年説と呼ばれている。この見解を保持している人々は、彼らがキリストは彼の一千年の支配の前に再臨されると信じているゆえに「千年期前再臨説主義者」と呼ばれている。これは、その箇所の最も自然な解釈であり、そしてそれは筆者の見解である。この箇所は、キリストの一千年間の支配を教えている聖書の中の唯一の場所である、ということは認めなければならない。しかしこのことは、その見解に対する反対理由とはならない。結局のところ、旧約聖書時代後期の預言者は教会時代を予見していない。彼らは主の日とその中におけるイスラエルの役割という見地で未来全体をみている。換言すれば、預言はその未来の眺望をひとつに折り重ねている。

より大きな問題は、千年王国についての神学である。ここで聖書が語っているすべては、サタンが反キリストの下でなしてきたように「それが諸国の民を惑わすことのないように」(黙示録 20:3)サタンが一千年間縛られるということである。その思想は、神が来るべき時代の前に、キリストが諸国民の上に彼の支配を及ぼす歴史上の一千年間が存在するように決定しておられるということであるように思われる。つまり、終わりを前にして、政治的、社会的、経済的正義のある時代が存在する。しかし、そのような社会においてさえ、依然として人の心は反抗的であり、悪魔が解き放されるとき、悪魔に応じるので、最後の審判において悪人に対する神の有罪判決はその真実性を立証する。

多くの学者はこの解釈を受け入れることができない。また違った方法で「第一の復活」を描くことができない。わずかの学者がその一千年間を世界における教会の勝利的な宣教と同意義のものとしてみなしている。魂を救うことだけでなく、クリスチャンの影響力によって政治、経済、社会的活動の領域を変革していくことは、教会の務めである。このように、「千年王国」という黄金時代は、教会において、教会を通して世界の中で神の働きにより成し遂げられる。そのような学者は、世界における明らかな悪にも関わらず、世界は実際にますますより良いものになっていき、それは黄金時代が達成されるまで続くと考えている。この見解は、過去には多くの学者に支持されてきた。この見解は、来るべき時代を開始するキリストの再臨が千年王国の後においてのみ起こるゆえに、千王国後再臨説と呼ばれる。もうひとつの見解は、無千年王国説と呼ばれ、多くの敬虔な、福音主義のクリスチャンによって正しいと主張されている。これは、未来において文字通りの千年

王国は存在しないという見解である。それは、黙示録 20 章はキリストの再臨において来るべき時代の開始を提起している他の聖書箇所を考慮して解釈されなければならないと主張する。一千年間は、教会時代に相当するものとして霊的に解釈されなければならない。この見解は、二つのかたちをとっている。ひとつのかたちにおいて、その箇所は獣によって殺害された殉教者の運命についての預言である。実際に死んだのではなく、彼らが迫害されたとき、彼らはキリストの勝利と支配を共有し、現実には死後も生き続けた。サタンは、無力なものとなっており、もはや彼らを傷つけることができない。

より人気のある無千年王国的解釈は、その一千年は教会時代と同義であり、教会の内にあり、また教会を通して世界におけるキリストの霊的支配を描いているとする。この見解と後千年王国説との違いは、キリスト教会を通してのキリストの支配は、それは神の国となっているのだから、世俗的な政治秩序を変革することはないということである。

さて、幾つかの聖書箇所がそのような見解を支持していることを認めなければならない。聖書は、聖徒がキリストの勝利と支配を共有すると教えている。「罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました」(エペソ 2:5-6)。霊的に、私たちは死の状態からよみがえらせられ、神の右に座しておられるキリストの治世とともにあずかるよう天そのもの引き上げてくださった。これが、黙示録 20 章が教えているものである。

現著者は、この終末論の立場を共にしていないが、ひとつのことは明らかである。この見解を保持するクリスチャンは、リベラルな解釈のゆえにではなく、彼らは神の言葉がそのことを要求していると自覚するゆえに、そのようにするのである。しかしながら、この箇所をその最も自然な筋道で解釈していないゆえに、現著者の見解である千年王国前再臨説に修正をせまる理由は存在しない。

私たちが、千年王国説の問題から離れる前に、私たちはディスペンセーション主義の千年王国前再臨説として取り上げられてきた、もうひとつのかたちの千年王国前再臨説に言及すべきである。これは、おそらくアメリカにおいて最も人気のある千年王国前再臨説のかたちである。それは、千年王国は第一義的にユダヤ人を対象としているという立場を保持している。イスラエルはその土地を回復され、神殿を再建し、そして旧約聖書の犠牲の制度は再び設けられる。この時点で、ひとつの民族としてのイスラエルについての旧約聖書預言のすべてが文字通り成就される。このことは、神が二つの異なった計画と別々の祝福をもったイスラエルと教会という、二つの別個で異なる民をもっておられるという確信から推論されて

いる。神のイスラエルに対する計画は、神政的であり地上的である。また、教会に対する神の計画は、普遍的であり霊的である。

彼はこの神学の中で生まれたのだが、もはや現著者はその立場を受け入れることができない。その読者は、イスラエルの未来が議論されたこの本の第二章で言及されている。ヘブル人への手紙 8 章は、礼拝において示されている実体がキリストにおいてもたらされたのだから、旧約聖書の礼拝制度という型と影の時代は廃止されたと、明確に語っている。ローマ人への手紙 11 章は、民族としてのイスラエルが救われる、しかしそれは教会と同様キリストにある信仰という同じ条件において救われるのであると、はっきりと語っている。今日教会は霊的なイスラエルである。そして文字通りのイスラエルはやがて再びオリーブの木に接ぎ木され、神の真のイスラエルに含まれるべきである。それゆえ、千年王国を第一義的にユダヤ的な特色をもつものとしてみなすことは不可能である。千年王国の後、来るべき時代が開始される時、ヨハネは新しい天と新しい地に聖なる都、新しいエルサレム下ってくるをみている。ここには、神の国の究極的な舞台は地上にある、という重要な事実が存在する。確かに、それはすっかり変貌させられた地球である。しかしそれでもなおそれは地上的な運命である。聖書はいたるところでこのことを教えている。パウロは「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます」(ローマ 8:21)。新しい創造に符合するのは、この本の別の章で議論した肉体の復活である。

新しく贖われた地球の描写はきわめて象徴的である。天の都、新しいエルサレムはかたちは巨大な立方体として描写されている。それは、150 マイルの長さ、150 マイルの広さ、150 マイルの高さからなっている(黙示録 21:16)。これは、明らかに象徴的なサイズである。それは想像力をうろたえさせる。その都は、ただ若干 200 フィートの高さの城壁で取り囲まれている。天のエルサレムは一体なぜ城壁を必要としているのか。200 フィートの城壁は、1500 マイルの高さに対してまったく不釣り合いである。それに答えることは難しくない。すべての古代の都は城壁に取り囲まれていた。そしてヨハネは地上の言葉と慣用語で天にある実体を描写した。その都には、それぞれがひとつの真珠でできている、イスラエルの 12 部族の名前が書いてある 12 の門があった(黙示録 21:12,21)。都の通りは、地上ではこれまで決して見たことのないような、透き通ったガラスのような純金でできていた(黙示録 21:21)。

象徴的な言葉で表現されている実体は明らかである。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられ」(黙示録 21:3)、「神の御顔を仰ぎ見る」(黙示録 22:4)。神は顔をもっておられるのか。「神の御顔を仰ぎ見る」、このことを熟考しなさい。そのことを理解しようと努めなさい。

最後には、神の贖罪の目的が実現される。キリストは、反キリスト、サタン、罪、死のすべての敵を彼に足もとに置かれる。神は、贖われた地球上で、神との完成された交わり、奉仕、礼拝の中に、旧約聖書(黙示録 21:12)と新約聖書(黙示録 21:14)時代の双方から贖われた人々を共に集められる。

ここまで、私たちは神の国の終末論を扱ってきた。私たちは、神の国が現在の事実でもあるという事実を指摘し、詳しく説明せずにこの主題を置き去りにすることはできない。イエスは「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」(マタイ 12:28)と言われた。またイエスは「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません」(マルコ 10:15)と言われた。そのような箇所や同様の他の箇所は何を意味しているのか。

この時代と来るべき時代の二つの時代の教理に戻ろう。ここまで、私たちはそれが来るべき時代に属するかのように神の国を扱ってきた。しかし、さらなる考察をもとにして、私たちはこの時代と来るべき時代の間の明らかな対照が根本的に修正されなければならないことに気づかされる。キリストは今の悪の時代から私たちを救い出そうとして私たちのためにご自身を捨てられた(ガラテヤ 1:4)。私たちはもはやこの時代と調子を合せてはいけない。私たちは心の一新によって自分を変えるべきである(ローマ 12:2)。換言すれば、私たちは悪の時代に生きているけれど、それから人々を解放する新しい力がその中に侵入している。さらに、ヘブル 6:5 は後にやがて来る世の力を味わった人々について語っている。死ぬべき運命、悪、罪、死の古い時代に生きつつ、私たちは新しい時代のいのちと力を経験する。このことは何を意味しているのか。それはどのようにしてもたらされるのか、そして神の国に関しそれは何を意味しているのか。

私たちは、神の国を、彼の敵を滅ぼし、彼の民に彼の支配の祝福をもたらすキリストにある神の贖罪的支配と定義した。私たちは、時代の終わりに、キリストは二段階でサタンを滅ぼすことをみてきた。彼は一千年の間縛られ、底知れぬ所に投げ込まれる。そしてその後には彼は火の池に投げ込まれる。キリストはすでにサタンの力を滅ぼし始められたのか。

その答えは明白に「その通り」である。イエスの最も特徴的な奇跡のひとつは、悪霊の追い出しであった。パリサイ人たちは彼を悪霊の力によって悪霊を追い出しているのだと非難した。イエスは、サタンの家のものが内輪もめして仲間割れをしていることを意味しているゆえに、そのような考え方はばかげたことだと言いつ返された。それから、イエスは「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」(マタイ 12:28)と言われた。ここで、神の王的支配はイエスにある聖霊の力において現在生き生きと働いているのだと断言されている。このことは、イエスの宣教における

精力的な活発な、神の支配の存在以外のなにも意味していない。それから、イエスは「強い人の家に入って家財を奪い取ろうとするなら、まずその人を縛ってしまわないで、どうしてそのようなことができますか。そのようにして初めて、その家を略奪することもできるのです」(マタイ 12:29)と話された。サタンは、イエスが悪霊に所有されている人々を彼の束縛から解放する前に、縛られなければならない。ある学者はこの縛りあげを黙示録 20 章の縛りあげと同じものとみている。しかし、この二つのものはまったく異なった背景に置かれている。

この節における私たちの問題は、「縛ること」は通常は全く行動ができないようにすることを意味することである。しかしこの意味はこの事例にはあてはまらないということは聖書から明らかである。私たちの主要なヨーロッパの学者のひとりはその箇所を、サタンは長いロープによってではなく、本当に縛られていると、風変わりな趣きのある解釈をしている。その論点は、イエスがサタンの支配する領域—彼の家—に侵入し、サタンを敗北させられた。つまりイエスがサタンを縛られた結果、サタンの力は打ち破られている。

同じことがルカ 10:18 の異なった表現で主張されている。イエスは彼の弟子たちにサタンを追い出す同じ力を与えられた。そして弟子たちが彼らの成功を報告したとき、イエスは「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました」と言われた。これは、サタンが彼の居場所を変えたことを意味してはいないそれは、サタンが彼の権威の座から打倒された、との言い習わしを比喩的に表現したものである。サタンはキリストの力によって打ち負かされた。これは、マタイ 12:29 と同じことを述べている。

イエスの全奉仕はサタンに対する神の国の勝利を構成している。ヘブル 2:14-15 は「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした」と、彼の死が悪魔の敗北を意味すると語っている。重要な言葉は「滅ぼす」である。また、慣用法において「滅ぼすこと」は減少させたり、絶滅させたりすることは何も意味していない。ギリシャ語ではこのことを意味しておらず、それは作動しない、あるいは無能な状態にすることを意味している。彼の生涯と死の両者において、イエスはサタンを敗北させられたので、人々はもはや奴隷である必要はなくなった。

神の国は、キリストが彼の敵を敗北させられたことにおける神の支配を意味する。「最後の敵である死も滅ぼされます」(I コリント 15:26)。私たちは、死が千年王国の後に火の池に投げ込まれることを見てきた(黙示録 20:14)。イエスは死を打ち破るために何かをされたのか。その答えはまた明確に断言されている。彼は「死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました」(II テモテ

1:10)。ここには驚くべき言及がなされている。「彼は死を滅ぼした」。彼は死に対して勝利を勝ち取られた。彼は死を征服された。

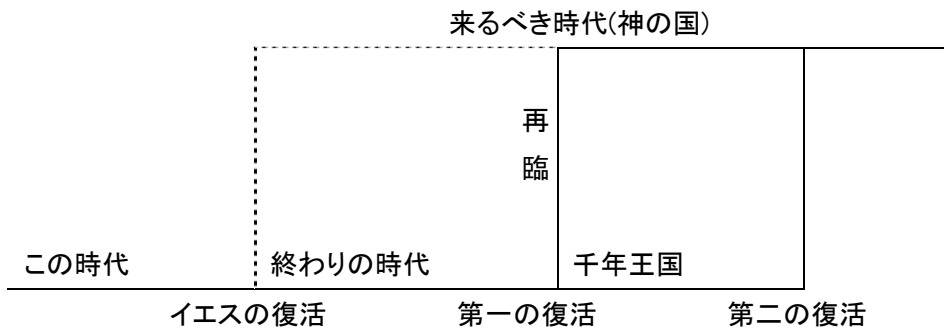
これは何を意味しているのか。明白に、それは彼が死を絶滅させたことを意味していない。未信者はもちろんのこと、クリスチャンもまた死ぬ。心理学も生理学も、クリスチャンと未信者の死体の間にいかなる相違があるのかを検出することはできない。死体に埋葬の準備をする葬儀屋も同様である。では、クリスチャンと未信者の告別式の違いは存在するのか。そう実際に、それは存在する。その人にとって、それは未来に向けて何一つ望みのない、最終的な心を引き裂かれるお別れである。クリスチャンにおいて、それは復活の時の「再会(au revoir)」あるいは「再会を期して(auf wiedersehen)」を意味する。私たちの肉体は死に至る。しかしキリストは光り輝くのちと不死をもたらされる。彼の復活それ自身が終末的出来事である。彼は死者の初穂であり、それは終末が開始されたことを意味する。神学者はそのような真理を神の国の現在性、そしてイエスの復活を「実現された終末論」と呼ぶ。終わりの日のひとつの出来事が歴史を分割し、そのただ中に据えられる。私たちは、神の国はキリストにおける神の贖罪的支配である、と語った。キリストは彼の贖罪的仲介的支配はどこで始まるのか。彼は「彼の足下に彼のすべての敵を置くまで支配」しなければならないのか。

多くの千年王国前再臨説主義者はキリストの支配の始まりを千年王国に限定する。しかし聖書は、彼がすでに神の右に座し、王として支配していることを明らかにしている。「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである」(黙示録 3:21)。キリストはすでに御座に着き、父なる神とともに王としての支配を共にしておられる。さらに「御子は…罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました」(ヘブル 1:3)。彼は神の御座に着き、神の右の座に着いておられると言及は、彼が王位に着かれたのと同じ事実である。キリストの王であることと主であることの間には差異はない。謙卑における彼の従順のゆえに、神は彼を高く引き上げられ、彼に、すべての名にまさる名前を与えられた。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためである(ピリピ 2:9-11)。その名前はイエスではない。これは彼の人間としての名前であった。その名称は「主:キュリオス(Kyrios)」である。高挙についての箇所は、彼は彼のすべての敵を足下に置くまで支配しなければならないという言及と同じ神学をもっている。ある人々は進んで、他の者は否応なく、すべての人がイエスは主であると告白し、彼の御座にひざをかがめるとき、その日は到来する。しかし彼は主として支配される。彼の王国は到来し、御心が天においてなされるように、地においてもなされる。

新約聖書教会の最初の告白はイエスが主であることであった。「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです」(ローマ 10:9)。これは、私は神がイエスを主とするために高く挙げられた、それゆえ私は彼を私の主として受け入れることを認める、という二つのことを意味する。

これは、「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません」とマルコ 10:15 で表現されているものと同じ神学である。神の王的支配は、私がひざをかがめる今日の現実である。それは、すべての人々が必ず彼の御前でひざをかがめる、世の終わりに力と栄光をもって現わされる。

それゆえ、来るべき時代の力はもっぱら未来にのみ存在しているのではなく、キリストにある人々のもとにすでに到来しているのだから、107 ページに図示された、この二つの時代の体制の構造は修正される必要がある。それゆえ、私たちは以下のような図を提案する。



神の国は来るべき時代に属している。しかし私たちが見てきたように、神の国は、力と目に見える栄光をもってではなく、柔和で謙遜なナザレのイエスにおいてすでに到来している。神の国の全貌は来るべき時代の到来なしに理解されない。しかしサタンはすでに縛られている。彼はすでに敗北しており、火の池に投げ込まれるという彼の最後の運命を待ち受けている。

私たちは、復活-少なくとも聖徒の-はイエスの再臨において起こることを見てきた。しかしながら、私たちはまた、キリストの復活が終末における復活の始まり-初穂-以外の何物でもないことを見てきた(I コリント 15:23)。ここに、この現在の悪の時代に侵入している、来るべき時代のもうひとつの祝福がある。イエスの復活はひとつの死体のよみがえりではなかった。それは、死すべき運命の只中における永遠のいのちと不滅の出現であった(II テモテ 1:10)。したがって、信仰者は、いまだに死すべき運命の、死につつまあるからだに住まわっているのであるが、今この場でイエスのいのちを分かち合うことができる。これは、ヨハネがそれほどし

ばしば永遠のいのちを現在の祝福として述べている理由である。このいのちとは、イエス・キリストを通しての父なる神を知ることであり、交わりである(ヨハネ 17:3)。

私たちはイエスのいのちを共にしており、私たちは霊的な死から霊的ないのちによみがえらされた(エペソ 2:1-6)のであるが、私たちのからだはいまだに死ぬべき運命にあり、死につつある。そのからだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きている(ローマ 8:10, RSV, NEB)。キリストの再臨のときの復活においてのみ、信仰者は「霊のからだ」-聖霊の力によってまったく変えられたからだを受け取る。しかしながら、聖霊の働きはもっぱら終末的であるだけではない。「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」(ローマ 8:9)。神はすでに私たちの霊を更新するために彼の御霊を与えられた。終末において、彼の御霊は私たちのまさからだを更新される。これは、来るべき時代の祝福のもうひとつの前味である。御霊の現在の賜物は「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です」(エペソ 1:14)。「保証」と訳されている言葉は、実際に「手付金」-単なる保証以上のものを意味している。御霊はすでに私たちの内側を更新された。この内的な更新は、復活のときに私たちは外側、つまりからだを更新してくださる御霊のまったき賜物の手付金である。

したがって、キリストにある神の支配つまり神の国の現在性、キリストの復活、永遠のいのちの賜物、聖霊による更新のゆえに、私たちは「時代の幕間」を生きている。私たちはまだこの現在の悪の時代の中を生きている。私たちはこれまで同様死につつある、死ぬべき運命のからだを所有している。私たちはすでに贖われているのだが、それでもなお罪人である。私たちは、古き悪しき時代と来るべき時代の重複によって特徴づけられる、新しい時代に入っている。

聖書はこの時代を「終わりの日」として語っている。これは二つの箇所から明らかである。ペンテコステの日に、神が彼の御霊を注がれたとき、ペテロはヨエルの聖霊の賜物についてのメシヤ的預言を引用、しかも付け加えて引用した。「神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ」(使徒 2:17)。旧約聖書において、「終わりの日」はしばしば、歴史の終わりにおける終末的な神の国の時代であるメシヤの時代を意味している(イザヤ 2:2、ホセア 3:5、エレミヤ 23:20 参照)。ペテロは、歴史の内側に終わりの日を置いた。主の日はそれでもなお未来にある(使徒 2:20)、そして終わりの日において先導されている。

ヘブル人への手紙は同じことを述べている。神は「この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました」(ヘブル 1:2)。多くの福音派のクリスチャンたちは、終わりの日を、最後の直前の最終的な時代として考えている。新約聖書はそれをイエスとペンテコステにおいて始められた新時代と同等視されている。来るべき時代の前味は、その現実のすべてをさらに意味あるものとする。クリスチャンは、二つの世界の間である。彼はすでにそのいのちと力を経験しているゆえに、来

るべき時代を相続するよう運命づけられている。このことは、「主イエスよ、来てください」という祈りすべてをさらに意味あるものとする。

安黒務の日本福音教会（JEC）・関西聖書学院（KBI）における
「福音主義神学：再考(Construction→De-Construction→Re-Construction)雑録」

M.J.エリクソン著『キリスト教神学』（略称：CT）・

宇田進著『総説現代福音主義神学』（略称：ET）

H.G.ペールマン著『現代教義学総説』（略称：CD）

日本福音教会（JEC）また関西聖書学院（KBI）独自の課題(略称：JK)^{xxxi}

| ET 講義 DVD ^{xxxii} 主題 | CT 講義 DVD ^{xxxiii} 主題 | 広義の福音主義神学 | 福音主義神学の再考 | |
|---|--------------------------------------|--|--|--|
| | | 構築された教えの中に内包する課題 | 脱構築 | 再構築 |
| | | Construction | De-Construction | Re-Construction |
| | | 提示されている諸説、課題 | 諸説を支持している聖句解釈の再分析・再評価、参考文献 | よりベターな聖書解釈に根差したガイドライン、方向性等の提示 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・岐路に立つ現代のキリスト教 ・近代精神の九つの相 ・モダンの発展とゆらぎ ・組織神学の退潮 ・神学形成の資料問題 | 1.神学とは何か | CD:①実存的(ないしは教会的)機能と②再生産的(ないしは要約的) CT:①聖書的、②組織的、⑤実際の | CD: ③生産的(ないしは新理解的)機能と④合理的(ないしは学問的)機能の必要 CT:③文化の脈絡、④今日的の追加 | CD: ①実存的(ないしは教会的)機能と②再生産的(ないしは要約的)+③生産的(ないしは新理解的)機能と④合理的(ないしは学問的)機能 CT:①第一義的に聖書を基盤とし、③文化一般の脈絡の中で、④今日的な表現を用いて、⑤生の諸問題に関連づけながら、②キリスト教信仰の諸教理について首尾一貫した言明をするべく努める学である。 |
| | 2.神学と哲学 | CT：アテネとエルサレムは何の関係があるか | 春名純人『哲学と神学』 | CT：哲学を適切に用いるなら、神学のための、明瞭かつ正確な基礎を形成する材料を提供する。 CT：神学における哲学の役割と位置…①神学の中身は、哲学からではなく、啓示から。②哲学は真理の体系というよりも、思索する活動。 |
| | 3.神学の方法 | <ul style="list-style-type: none"> ・個々の教理をばらばらに ・いわゆる一節主義 ・極端な字義的解釈 ・読み込み、こじつけ解釈 | | CT：①文化と同調しすぎない、②折衷主義が可能、③独立性をもって神学をする CT：十段階の神学の方法の提案 CT：六段階の神学的言明の権威の度合いの識別 |
| | 4.神学と聖書の批評的研究 | CT：批評的研究の頭ごなしの否定 | CT：さまざまな形態の批評学の方法論の検討・批評 | CT：批評学の諸種の方法論を適切に評価するガイドラインの作成 ^{xxxiv} |
| | 5.キリスト教のメッセージの今日化 | CT：①聖書概念を聖書の用語において表現すべきであると見る立場。②メッセージの変革者の立場 | | CT：③メッセージの翻訳者の立場 CT：永続性の五つの基準の提案 |
| | 6.神学とその言語 | | CT：直接的検証のできないものは、無意味である。 | CT：宗教的言語は、幅広い総合的体系によって認識し意味あるものとなる。 |
| | 7.ポストモダンと神学 | CT:地質学が地球年齢にある程度の知識すら与えていないかのような解釈 | CT：ポスト・モダニズムの功罪を分析・評価 | CT：対立部分を拒否し、矛盾せず補佐する部分を活用するガイドライン作成 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・啓示概念のシフトと多様化 ・自然神学への回帰 ・神の一般啓示はどのように？ ・神の特別・救贖啓示と聖書 | 8.神の普遍的啓示 | CT：一般啓示の現実と有効性の問題…自然神学～一般啓示の否定 | CT：関連聖句の検討 | CT：自然神学なしでの一般啓示 CT：一般啓示と人間の責任に対する、より繊細なアプローチ |
| | 9.神の特別啓示 | CT：特別啓示の“人間性”…①人格的、②人間的、③類比的性質 | CT：“人間性”の役割・機能の分析・評価 | CT：特別啓示は、命題的かつ人格的 |
| | 10.啓示の保 | CT：靈感の諸理論…①直感 | CT：③動態説、④言語説の評 | CT：聖書の靈感とは、聖書記者たち |

| | | | | |
|--|----------------------|----------------------------------|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・聖書に関する十二項 ・K. バルトの神の言葉と日本の教会 ・「正典の中の正典」論議と聖書の捕囚 ・聖書の非神話化論—基本論理 ・ポスト・モダニズムの挑戦と神学の再構築 | 存：靈感 | 説、②照明説、③動態説、④言語説、⑤口述筆記説 | 価 | に対する聖霊の超自然的影響を意味する。そのことによって、彼らの文書を啓示の正確な記録とし、また彼らの書いたものを実際神の言葉であるように結実させてのである。 |
| | 11.神の言葉の信頼性：無誤性 | CT：無誤性の諸概念…①絶対的、②全的、③限定的、④目的の無誤性 | CT：②全的無誤性の評価 | CT：聖書は、それが書かれた時代に文化と伝達的手段がどれくらい発達していたかということを考慮に入れて、また、それがどのような目的で与えられたものなのかという視点で正しく解釈するなら、すべての記述について完全に真実である。 |
| | 12.神の言葉の力：権威 | CT：当時の人々を拘束するもの～私たちを拘束するものの識別 | CT：一時的な形式と普遍的な本質の識別 | CT：歴史的権威と規範的権威の識別 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・神の死と神の変様—逆説的内在化、等 | 13.神の偉大さ. | | | |
| | 14.神の慈しみ深い善性 | | | |
| | 15.神の近さと隔たり：内在性と超越性 | 医学と奇跡の関係 | CT:内在的働きとしての医学と超越的働きとしての奇跡、フラー教授会のパンフレット | |
| | 16.神の三一性：三位一体 | | | |
| | 17.神の計画 | | | |
| | 18.神の原初的なみわざ：創造 | JK:素朴な創造論理解のレベル、「創造科学研究会」等の影響もある | CT:今日、私たちは「地質学」について何の知識もないようなかたちで神学をする必要はない | 「漸進的創造論」等、多様性と幅のある創造論理解の取り組みの必要 |
| | 19.神の継続的なみわざ：摂理 | | | |
| | 20.悪と神の世界：一つの特別な問題 | グノーシス的の二元論理解の影響 | 厭世的な人生観の克服、被造物世界への責任 | |
| | 21.神の特別な代理人 | JK:悪の問題、墮落した天使の問題の扱いと宣教 | 『霊の戦いに関するナイロビ声明』 ^{xxxv} | 山崎ランサム和彦著『平和の神の勝利』 |
| | 22.人間論への序論. | | | |
| | 23.人間の起源 | | | |
| | 24.人の中にある神の像 | | | |
| | 25.人の構成の性質 | JK:ペンテコステ・カリスマ派系は三分説が多い | CT:支持聖句解釈の吟味・検証の必要性… I テサロニケ 5:23、ヘブル 4:12 | CT:条件付き統一性をも考慮すべき |
| | 26.人類の普遍性 | | | |
| | 27.罪の本質 | | | |
| | 28.罪の起源 | | | |
| | 29.罪の結果 | | | |
| | 30.罪の重大性 | | | |
| | 31.罪の社会的側面 | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・宗教的多元主義の神学と「キリストのみ」 | 32.キリスト論の方法における今日の問題 | | | |
| | 33.キリストの神性. | | | |
| | 34.キリストの人性 | | | |
| | 35.キリストの人格の統一性 | | | |
| | 36.処女降誕 | | | |

| | | | | |
|--------------------|---------------------|--|---|---|
| ・キリストの贖罪—福音主義の品質証明 | 37.キリストのみわざへの序論 | | | |
| | 38.贖罪の諸説 | | | CT:贖罪論諸説の同心円的理解 |
| | 39.贖罪の中心的テーマ | | | CT:刑罰代償説を中心としつつ、霊の戦いの文脈における悪に対する勝利説の位置づけ |
| | 40.贖罪の範囲 | JK:「贖罪と癒し」の関係理解 | | |
| | 41.聖霊の人格 | | | |
| | 42.聖霊のみわざ | JK:「異言を伴う聖霊のバプテスマ」の教え | R.H.カルベッパ『カリスマ運動を考える』とその重要参考文献、J.D.G.Dunn "Jesus & the Spirit", H.ベルコフ『聖霊の教理』 | “アバ”意識の同心円の派生としての異言理解 ^{xxxvi} 、“子とされること”の教理の主観的側面理解、聖霊の満たしの目的としての「召命論」 ^{xxxvii} |
| | 43.救いの諸概念 | | | |
| | 44.救いに先立つもの：予定 | JK:スウェーデン・バプテスト系は穏健カルヴァン主義に立つ多数派の中に、アルミニウス主義の人々を包摂しているという背景がある | 牧田吉和「改革派信仰とは何か」の「予定論を見つめる視点」は大切である | |
| | 45.救いの始まり：主観的側面 | JK:リバイバリズムの影響 | S.E.ミード『アメリカの宗教』における「リバイバリズム」の分析から学ぶ必要 | |
| | 46.救いの始まり：客観的側面 | JK:救いと聖霊の主観的経験を重んじる反面、客観的立場の理解が希薄 | CT:エリクソンは、聖書観と救済論を詳述している。「救い」を主観的と客観的のコインの両面でバランスよく理解する | |
| | 47.救いの継続 | JK:ウォッチマン・ニー『キリスト者の標準』 | Dana.Robert "Understanding Watchman Nee", J.R.McQuilkin 'Keswick View' "Five Views on Sanctification" J.I.Packer "Keep in Steps with the Holy Spirit" | 「ウォッチマン・ニーの聖化論」と「ヘンドリクス・ベルコフの召命論」 ^{xxxviii} |
| | 48.救いの完成 | | | |
| | 49.救いの方法と範囲 | | | |
| ・教会の理解と誤解 | 50.教会の本質 | | | |
| | 51.教会の役割 | JK:政治と教育の右傾化とそれへの迎合 | | JK:憲法問題とJEC ^{xxxix} JK:右傾化する時代におけるJEC ^{xl} |
| | 52.教会の政治 | JK:会衆政治の中における信徒長老の役割・機能・神学的位置づけの課題 | | |
| | 53.教会の入会儀式：洗礼 | JK:「信仰者のみの洗礼」の低年齢化における課題 | | |
| | 54.教会の継続儀式：聖餐 | JK:未信者への陪餐の許容の問題 | JK:聖餐論問題の取り扱いメモ ^{xli} | |
| | 55.教会の一致 | JK:スウェーデンにおける宣教団体の合従・連衡の今後への影響 | アイデンティティの希薄化現象の時代にあって、その継承・深化・発展へのマッピングは | |
| ・キリスト教終末論の行方 | 56.終末論への序論 | | | |
| | 57.個人終末論 | JK:「セカンド・チャンス論」への直面 | エリクソン『キリスト教神学』、「How shall They be saved?» | 「セカンド・チャンス論」批判セミナーとDVD講演録 ^{xlii} |
| | 58.再臨とその結果 | | | 一体的再臨 |
| | 59.千年王国と患難時代についての諸説 | JK:「古典的ディスペンセーション主義」の影響 | C.B.Bass "Backgrounds to Dispensationalism", R.ボウカム『ヨハネの黙示録の神学』 | 岡山英雄『小羊の王国』、G.E.Ladd "Last Things" ^{xliii} 「古典的ディスペンセーション主義聖書解釈」の問題 ^{xliiv} |

| | | | | |
|--|--------------------|-----------------|---|-------------------------------|
| | 60.最終の状態 | グノーシスの二元論の影響の課題 | ファンルーラーに関する牧田論文、山中良知『聖書における労働の意義』、『我らの故郷は天にあらず』 | 栄化されたからだを着せられ、贖われた被造物世界に生かされる |
| | 61.結びの短章 | | | |
| | ・福音主義と日本の教会 | | | |
| | ・期待される神学と霊性の問題 | | | |
| | ・付録：神学的動向の分析・予測・対応 | | | |

- i 宇田進『福音主義キリスト教と福音派』いのちのことば社、1993、pp.34-39
- ii これらの宇田氏の神学的な定義から、一般によく言われていた「福音派對カリスマ派」という描写の盲点を教えられた。このコントラストで神学的立場を理解すると、「福音主義神学對カリスマ主義神学」という誤解も生まれやすい。そうではなくて、広範な福音主義的立場に立脚しつつ、カリスマ的経験に開かれたスタンスの、いわば「カリスマ的福音主義神学」という立場もあるということである。K G K時代の三年間をクリスチャンとしての“三つ子の魂”の時代とする私にとって、健全でバランスのとれた“福音主義神学”に根差しつつ、健全でバランスのとれた“カリスマ的経験”を受け入れる神学的範疇の探求は常に大きな課題であり続けた。このテーマに関する長年の取り組みと資料は、下記のサイトに掲載されている。http://www.aguro.jp/d/file/22_jec00.htm
- iii 熊沢義宣・野呂芳男編『総説現代神学』、宇田進「現代福音派教会の神学」日本基督教団出版局、pp187-188
- iv 前掲書、p.49
- v 前掲書、pp.49-51
- vi わたし自身も、そうであったが、自らの信仰の「ルーツとアイデンティティ」を戦後五十年間の教派の歴史と信仰の中で受けとめる傾向を持っていた。神学校で学ぶ神学生も同様の中にある。しかし、これでは、自らの信仰の全体像をみることができない。「五人の目の不自由な人と象」の例話の通りである。わたしの教えている関西聖書学院には、ペテロス系諸教会からの神学生が多くつどっている。またわたしの所属している日本福音教会は、カリスマ的な経験に開かれた団体である。それゆえに、福音を、いわゆる“聖霊のバプテスマ”あるいは“聖霊の満たし”の視点からのみ見る傾向がある。しかし、バランスのとれた神学素養を養う責任ある教師としては、「鹿を追う者、森を見ず」という状態は避けなければならない。その意味で、二千年の教会史の全体の中に自らのルーツとアイデンティティを探求し、その鳥瞰図の中で、自らの位置を絶えず確認していく学びを施したのである。http://www.aguro.jp/d/file/k/kbi_eth00.htm
- vii 安黒務編『J E Cの源流と歴史的遺産』J E Cニュース連載記事、http://www.aguro.jp/d/jec/jecet_all_color.pdf
- viii J E Cがエリクソンとルーツを同じくするスウェーデン・バプテスト系諸教会についての記述 http://www.aguro.jp/d/file/j/jec_news00.htm
- ix 使徒信条の構成にそって、J E Cの信仰とその神学的記述としてのエリクソン著『キリスト教神学』の関係性を解説したシリーズ http://www.aguro.jp/d/jec/09_Apostlic_Confession_and_JEC_Confession_in_JECNews_all.pdf
- x M.J. Erickson “New Evangelical Theology” Fleming H. Revell Company, pp.13-44
- xi 前掲書、pp125-128
- xiii M.J.エリクソン『キリスト教神学』第四巻、G.E.Ladd “The Blessed Hope” “The Last Things”、岡山英雄論文『患難期と教会』、著書『小羊の王国』は、その著作集の中で、

大患難期後の空中再臨・携挙・地上の一体的再臨の歴史的千年期前再臨説を主張している。

xiii C.B.バス『ディスペンセーション主義への背景：その歴史的誕生と教会的意味』をテキストにしたDVD講演録としては、安黒務『(古典的)ディスペンセーション主義聖書解釈の問題』ICI、90分、1500円がある。

xiv アリスター・マグラス著『キリスト教の将来と福音主義』いのちのことば社、1995、pp.34-59

xv 牧田吉和『改革派信仰とは何か』聖恵授産所、2000年、p.31

xvi Robert Webber “Common Roots : A Call To Evangelical Maturity” 1978

xvii この六つの潮流の中で、JEC また KBI における私の立場は、②穏健ファンダメンタリズムの影響下にあり、⑥カリスマ運動に開かれたスタンスを保つ教派また神学校の只中で、③ポスト・ファンダメンタリズム的福音主義の取り組みであるといえる。

xviii 前掲書、pp.181-185

xix “New Dimensions in Evangelical Thought” David Dockery

xx 宇田進著『総説福音主義神学』の「<付録>『神学的動向：キリスト教神学はどこへゆくのか?』」の分析と予測、それへの対応に関する方法上の要綱—M. Erickson : Where is Theology Going ?, 1994 をめぐって」に概略が紹介されている

xxi M.J.エリクソン著『キリスト教神学』第一巻、pp.174-194

xxii 宇田進『日本の福音主義神学に未来はあるか』第八回 現代福音主義セミナー資料、1988

xxiii H.G.ペールマン著『現代教義学総説』新教出版社、2008年、pp.36-55

xxiv シカゴ・コール<前文>「いつの時代でも、聖霊は教会に対し、聖書による神の啓示に忠実であるかどうかの精査を命じられる。われわれは、教会における福音主義の復興をとおして神の祝福が与えられていることを感謝している。しかしながら、そのような成長期にこそ、またわれわれ自身の弱点について一層敏感であることが必要である。現代の福音派は、歴史的キリスト教信仰を縮小変形させているために、自らの十分な成熟の達成を妨げられている。それゆえ、聖書の歴史的信仰の本質を再考し、その遺産の豊かさを再発見することが差し迫った必要となっている。」(宇田進『福音主義キリスト教と福音派』いのちのことば社、1993年、p.244)

xxv 前掲資料

xxvi 宇田進『総説現代福音主義神学』いのちのことば社、2002年、pp.3-4

xxvii 「第一義的に聖書を基盤とし」は、エリクソン著『キリスト教神学』第一巻の p.17 に記されている「神学の定義」である。

xxviii 宇田氏は、「啓示論」の講義の最初に、今日の神学における最大の課題は“認識”の問題であると板書して始められた。インマヌエル・カントを「認識論」における分水嶺と位置づけ、啓蒙思潮→リベラル神学への展開において、最大の神学的課題のひとつが“認識”の問題なのである。

xxix 宇田進『福音主義キリスト教と福音派』 p.136

xxx 「ローザンヌ誓約：解説と注釈」 p.24 世界大伝道を第一の関心事としていた「ローザンヌ誓約」が、聖書の権威に関する声明を含み、それを神の教理の次という重要な位置におくことによって強調していることは奇異に感じられるかもしれない。しかし、これは、最初の講演を『聖書の権威と伝道』とした会議のプログラムの忠実に反映している。宇田進博士は、その講演を「権威の問題は、キリスト教会が常に直面せねばならない最も根本的な問題である」ということばをもって始められた。

xxxi 日本福音教会(略称：JEC)と関西聖書学院(略称：KBI)に関する拙稿・関連資料は、下記サイト等に掲載されているので参考にさせていただきたい。

- ・「JEC 信仰告白解説」 http://www.aguro.jp/d/jec_kbi/jec_confession_061003.pdf
- ・「JEC の源流と歴史的遺産」 http://www.aguro.jp/d/jec/jecet_all_color.pdf

-
- ・「JEC のアイデンティティ」 <http://www.aguro.jp/d/file/j/jec01.htm>
 - ・「JEC の神学的座標軸」 http://www.aguro.jp/d/file/j/jec_theology.htm
 - ・「JEC アイデンティティ研究室」 http://www.aguro.jp/d/jec/00jec_index.html
 - ・「聖霊のバプテスマの神学と経験に関する論稿集」
<http://www.aguro.jp/d/file/b/booklist02.htm>
 - ・「宗教的・カリスマ的経験の座標軸」論稿、2009年3月～2010年2月、『リバイバル・ジャパン誌』に連載中
 - ・「ICI 資料リスト」 <http://www.aguro.jp/d/file/b/booklist04.htm>
 - xxxii 「総説福音主義神学」DVD 講義録 <http://www.aguro.jp/d/file/u/usciet00.htm>
 - xxxiii 「キリスト教神学」DVD 講義録
http://www.aguro.jp/d/file/v/v_k_04-06/c_v_ct00_k04-06.htm
 - xxxiv 聖書の批評的研究に関するセミナー資料
 - ・「福音主義神学の基礎・批評学的研究・バルト神学・ポストモダン神学」(ペンテコステ神学会夏期研修会) http://www.aguro.jp/d/file/p/ptm_20050808-09.htm
 - ・「現代における福音派の神学」(関西学院大学神学部における特別講義)
http://www.aguro.jp/d/file/k/kg_cet_intro.htm
 - xxxv 「霊の戦いに関するナイロビ声明と JEC」
http://www.aguro.jp/d/jec/080701_JEC_News_z_color_Report.pdf
 - xxxvi 「J.D.G.ダンの『イエスと御霊』に関する一考察」
http://www.aguro.jp/d/file/j/jec_is00jo.htm
 - xxxvii 「宗教的・カリスマ的経験の座標軸」『リバイバル・ジャパン』誌論稿、2009年3月～2010年2月、イエスと初代のクリスチャン、そして今日における宗教的カリスマ的経験をどのように理解すべきかについての神学的エッセイ集
 - xxxviii 「ウォッチマン・ニーの聖化論」と「ヘンドリクス・ベルコフの召命論」
http://www.aguro.jp/d/stream/all/070508_k_p10_f_sanctification_in_NCL_by_WN.wmv
 - xxxix 「憲法問題と JEC」
http://www.aguro.jp/d/jec/070703_the_Bible_and_War_and_Biblical_Peace.pdf
 - xl 「右傾化する時代における JEC の信仰と宣教」
http://www.aguro.jp/d/jec/08_Lord_Prayer_Today_for_JEC_01-06_all.pdf
 - xli 『まことの聖餐を求めて』芳賀力編、教文館 — 「未受洗者配餐問題」に関し、JEC 聖餐論のひとつの基礎資料の紹介—http://www.aguro.jp/d/file/m/mi_200901-03.htm
 - xlii 「セカンド・チャンス論」批判
http://www.aguro.jp/d/jec/071113d_Evaluating_Second-Chance-Theory_Criticaly_JEC-PM_color.pdf
 - xliii G.E.Ladd の歴史的千年王国前再臨説
http://www.aguro.jp/d/jets_west/20060424_jets_spring_meeting_0323.pdf
 - xliv 「古典的ティスペンセーション主義聖書解釈」の問題
http://www.aguro.jp/d/jec_kbi/091006_jec_ag_Dispensationalism_Problem_b.pdf